

文樂座人形浄瑠璃

初春興り
總出演

五百永

お吉

大垣

お七

おきよ

お吉

母

一部金十五銭

文樂座

四ッ橋

文樂



大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

三味線

三味線

勸進帳

勸進帳

新編

新編

世中

世中

本下

本下

世

世

世

世

世

世

世

世

世

世

三味線

勸進帳

新編

世中

大美自來水

當 戊 歲 初 春 興 行

文 樂 人 形 淨 瑠 璃 總 出 演

二 日 目 豫 定 時 刻 表

南 部 二 月 堂 良 辨 杉 由 來

志 賀 の 里 二 月 堂 まで

櫻 の 宮 物 狂 里 (三 時 三 十 分 まで) (三 時 二 十 五 分 四 時 十 分 まで)

東 大 寺 の 段 (四 時 十 分 四 時 廿 五 分 まで) 二 月 堂 の 段 (四 時 二 十 五 分 五 時 四 十 分 まで)

幕 間 十 五 分 間

花 競 四 季 壽

(五 時 五 十 五 分 六 時 廿 五 分 まで)

幕 間 十 分 間

木 下 蔭 狹 間 合 戰

竹 中 官 兵 衛 營 の 段 (六 時 四 十 五 分 八 時 十 五 分 まで)

幕 間 十 分 間

心 中 天 網 島

紙 屋 内 の 段 (八 時 二 十 五 分 九 時 卅 五 分 まで)

幕 間 十 分 間

安 宅 關

勸 進 帳 の 段 (九 時 四 十 五 分 十 時 五 十 分 まで)



志賀の里の段

豊竹呂太夫
鶴澤 豊澤猿二郎
ツレ 豊澤仙三郎
八雲 豊澤綱延
鶴澤 豊澤綱延

人形

渚の方 吉田文五郎
一子光丸 吉田玉丸
乳母小枝 桐竹紋太郎
腰元藤野 桐竹紋司
腰元春枝 吉田玉米

南部りやうへんきぎゆうらい
二月堂良辨杉の由来

この「良辨杉」は加古千賀女の作で、豊澤團平師の節付であります。千賀女は團平師の妻女でこの他にも「靈験記壘坂」の力作があります。「良辨杉」の初演は明治二十年二月の彦六座の手欄に掛けられたもので初代豊竹柳適太夫、三味線豊澤廣作後六世廣助師に創まつたものであります。其後歌舞伎へも移入せられ雅趣豊かな至難の名曲として傳へられて来たものです。只今では古軼太夫の極め附さなつてゐますが、古軼太夫の初演は大正十年五月の御靈文樂座で練は故三世清六でありました。全段は志賀の里の段、櫻の宮物狂の段、東大寺の段、二月堂の段から

成立つてゐます。

(床本) 志賀の里の段

M 宇治は茶所茶は縁所 宇治におさらぬ志賀の里、野面瀬も畑も一樣に、赤い襷に手拭も、思ひ思ひの紅しほり、一番つみも早過ぎて、二番中ばの卯の花や、空に一撃時鳥、泣きつる方のゆかしさよ、都の雲井いつしかに、近江に住居寫繪の、夫には去年にみまかりて、何を便りに渚の方、忘れがたみの若みどり、蝶よ花よもかし付の、めのごがかさすひがら傘、茶籠を手んでに茶つみ歌、君さならんで茶の目をつんで、木々の露やら涙やらチ、しよんがへく調ふ聲がしましく、若い女中のお手車、腰元ぶじのが手をつかへ、けふ

は一入空も暗々、お前様にも殿様に
此の春お別れ遊ばして、嘸や明けく
れお淋しがるこ、云ふをめのこの小
枝が搦寄り、ほんにふじののいふ通
り、また三十になるならず、後家
にお成り遊ばすは、モ、よくく殿御
に縁うすし、おいとしぼやこ兩人が
云ふをかばして渚の方、これはした
りそなた衆は、女の道を知ずかや、
譬へ二十は愚かな事、十五夜月の振
袖も一度殿御に別れては、後を守る
は女子の道、まして、光丸さいふ世
繼成人させて、夫の跡、相續さする
がわらば役、必ずく仇口にも、
たわむれ事を云ふまいぞやこ、姿
心も立増る、邊が宮家の舊臣に、水
無瀬左近が妻ぞかし、腰元共は顔見
合し、手持無沙汰に見へにける、め

のこ小枝が取りなして、奥様の仰せ
の通り、それに付ても三年以前、殿
様茶づみの御慰み、御酒宴長じて奥
様が、舞の一さし金地の扇は、コレ
今若様のお持遊ばす御かたみこ、云
ふをふじのの搦寄つて、三年の昔思
ひ出す、殿様への御さむらい、二つ
には又、若君様の御成人、壽く爲の
末廣にて只一さしと御前に、進め申
せば渚の方、殿様在世の御物好、何
も佛の御供養と、扇をさつと押開き
かさし給へばふじのは心得、花毛せ
んを敷きつらぬ、其身も俱に膝に手
を、聲はり上げて其歌に、なまめく
や今も昔の男舞、かへすや袖の折も
よく、さす手引手におのづから、あ
の山見さい、此山見さい、明ぼのに
ほふ紫の、其面影の先ン殿に、似

たりやく愛盛り、あつちくのゆ
びざしに、めのこは茶園あつちこち
さいざなひ歩む其折しも弓手のひへ
の山嵐、俄かにさつと早ち風、打着
毛せん茶籠まで、皆ばらくと吹き
まくり、あはやと驚く女中達、袖を
目に當てそふんぐが、うるたへ騒ぐ
其中に、母は我子も案じられ、茶園
の畦を一文字、ばせくる向ふへ山鷲
の、羽風と共に若君搦み、空に飛び
行く有様に、あわて驚き狂氣の如く
聲を限りに追ひ廻せど、雲井はるか
に舞ひ上る、アレヨアレヨと泣き叫
ぶ、母は元より腰元も、畑も茶園も
踏み越へ飛び越へ泣くも泣かれずハ
アハット、其儘そこに身を轉び、空
をにらんで返せ戻せ、光丸よく、
天にも地にも一人子の、まして別れ

櫻の宮物狂の段

竹本 鍛 太夫
 豊竹 和泉 太夫
 竹本文 太夫
 竹本 陸路 太夫
 竹本 播路 太夫
 豊竹 千駒 太夫
 竹本 淀路 太夫
 竹本 津の 太夫
 竹本 叶美 太夫
 豊竹 好太夫
 竹本 越名 太夫
 竹本土 佐子 太夫
 豊澤 新左衛門
 鶴澤 芳之助
 豊澤 廣太郎
 鶴澤 寛市
 鶴澤 叶太郎
 鶴澤 友作

し夫の篋早うそなたを成人させ、水無瀬の家を起さんと、母が思ひもエ水の泡、けふから一人この母が、何樂しみになひらへる、譬へ此の身は、國の果て、深山の奥の谷の影千尋の底に沈む共、命の限り、こん限り、尋れおふせて置くべきか、姿形もあらしく、駈け行き給ふを右左、さゆる女中振切り、只手をあげて我子を返せ、悪鳥よ、つばさもくされ、はしくされ、返しくされ泣きわめき、心亂れて行方も何國を當て當途なき、雲井目がけて一さんに狂ひ行くこそ哀れなり。

(床本) 櫻の宮の段

M 見渡せば大江の岸の春霞、四方の浦へ寄浪に、ちらちらと散

花の、たなびく雲さうたわれ、鳥居も花につままれて、色香櫻の宮柱ゆるむ御代の花遊山ふくべのさ、に千鳥足、扇をかざすさんざや花を目當に花を賣、娘盛が花かんざしを、わらわつかれて宵竹さして、赤いけだしの裾からげ、手笈手品もしほらしく、人を集めて立留り、サアくめせよ花かんざしを、いさしま方のかほよ花姿、すうわり撫し子の末をゆたかに富貴草、サアくさい、いめせこそ呼にける、折もひよかひよか吹玉や、しやぼん玉や吹玉や、吹けば色々の玉が出るいさ様方やぼん様へ、鳥渡手見せの千成やふけくくく色玉や、伊勢に名高きお杉お玉、目玉ひよつくり玉丁ちん、玉小玉、エ、龍宮城ではふ

人形

鶴鶴鶴野豊豊鶴野
澤澤澤澤澤澤澤澤
綱友友市新仁園八
三之太伊
治郎花助郎平三造

吹 玉 屋 吉 田 文 作
花 賣 女 吉 田 光 之 助
渚 の 方 吉 田 文 五 郎
里 の 子 大 ぜ い

はいの玉品玉お手玉さがり玉、下り玉さは何ちやいな、いふてはひよつと呵られる、構はぬくく言うてんかそれは私もこのもしい人氣玉ではないかいなサアくサ、い、い、買たり買しやひせ、玉屋くぞ呼あるく、亂れてしかひもあらしのいたづらに、空心さへ現なき、夢にも夫さ面影の、忘れかれたる恩愛に、迷ひ出たる渚の方、姿もふりも見るめさへ縫の小袖もきれく、に、現心うつくしの亂れ髪、櫻が枝に薫草屢、ぶらくくく迷ひ來る、跡に大勢里の子も、ヤア氣違ひよ法界よ、法界よくくくこ、追つ廻しづ來りける、コレく子供衆、アノ光丸は何さした、なげさそふておじやらぬぞ、伯母がよい物おまそうぞ呼でおじや連ておじや、サ、い、い、い、呼んでくさ泣沈む、見るに不便さ里人が、寄集りて、コレく女中、こなたは何で其様に、氣をさりのぼせていたわしや、心しづめて其わけをさ、言ふにこなたはむつくさ起、アレくくアレく、ソレくくく、今の羽風はありや誰じや、わしぢやエ、思はしや情けなや。其鶯故にいさし子を、雲のあなたへアレくく、花咲木々の梢さへ、鳥のやどりの恨みしや、雲井の月もモウいくつ、十三七七七織の、今度京へ登つて、守りのせとで其守り、小像如意輪觀世音、なげいさし子の行末を、知らぬさ云ふて濟かないな、守り云ふはねんれこの、ねんれが守りはごこへいた、山へ鳥が連てゐた、跡に

東大寺の段

竹本町太夫

野澤吉左

人形

渚の方 吉田文五郎

雲彌坊 吉田小兵吉

は何の筐ぞや、でん／＼太鼓ふりつ
 いみ、廻れ廻れ風車、母の涙に張乳
 の残して嘸や夜も晝も、泣聲空にソ
 レ／＼ソレ／＼、アレ／＼／＼／＼／＼
 あれ／＼と、伏轉び、あなたこなた
 へくる／＼／＼、くるりくるりこ青
 柳の、風に亂れて川の面、あなたこ
 なたへ泣叫び、當途も涙の川上へ、
 さまよひ行かけ思はずも、我倅の
 水の面、かはり果てたる顔のなみ、
 ふつこ氣の付き渚の方、ハア爰は所
 も何國ぞや、ア、淺ましやく、姿
 形のかわる迄さまよいあるく愚かさ
 よ、我子は既に荒鷺に、命を取られ
 其時に、何國の果に亡骸も捨たる事
 さへ今更に、思ひ廻せば幾歳を、さ
 まよひくらす恥かしさ、せめて我子
 の菩提の爲志賀に歸りてさまをかへ

世にあじきなき身一ツを、墨の衣に
 障滅の、後世を佛に仕へんぞ、心定
 めて立上り、ノウ／＼船人乗てたべ
 登りの船よ舟人よと、呼ばよりくる
 登り船、サア／＼艘へ乗給へと、こ
 りん／＼乗せる引舟の中に市人四方や
 まの咄しに何ぞ奈良坂や、今東大寺
 の大僧正、良辨と云ふ聖こそ、稚い
 頃に驚と云ふ大きな鳥にさらはれて
 成人の後廣大の學者の聞へ世に高し
 と、人の噂も其身には、耳を貫く親
 心、現心の夢さめて、思はず聞し
 ほだし草、今は何さて暫しさへ、爰
 に心も濱千鳥、飛で行きたき心さへ
 身は儘ならぬ登り舟、牧方裏に見る
 よりも、船を頼みてつく／＼と、南
 都さしていそぎける。

(床本) 東大寺の段

M 名も高き名も南都の大寺院、時の帝の勅願所、宗法廣き東大寺、玄關前の切石に、影をこめしめし、打水に、引しほりたる紫の、暮も雲かさいと尋き、大門前の下馬札に、乘はなしたる馬廻り、供侍の諸士從の者、武家公卿の御代參、出入も重き盛砂に、門前狭しと待居たる、老の身の昔の姿いつしかに、我にもあらで幾させを何國の浦に吟ひし、亂心の夢覺て、夫ぞと思ひ人づても、心の儘に奈良坂や、漸爰に渚の方大門近く歩みより、杖をさげめて一人言、淀の渡りの船の中にて、人の噂にけるんくそ、又さまよふて漸ぞ來る事は來ても淺間しい、乞食非人の何として、誰にたよりて問事も心細やと延上り、見廻し／＼そこ爰

こ、寺門の様子餘所ながら、伺ひ見れどおごそかに、寄付事も淺間しき我身の様に氣おくれし、思案もいづる涙さへ、胸にせまりて居たりける折から寺の門内を小足に急ぐ件僧がこなたへ歩み來かゝるを、見るに嬉しく老女は驅けより、おづ／＼前に這かゞみ、卒爾ながらお見かけ申しわりない御無心、お情けと云ふ件僧立留り、アゝコレ／＼つかしやるな非人殿、お上人様の御用で四條迄急ぎの御使心がせく、殊更愚僧は今爰に持合せもござらぬ程に跡でくりの男に言ひ付お鉢落しを貰ふてやる、そこ退しやれと行過る、袖を控へて手を仕へ、アゝイエゝ私もお願ひは御報謝お手の内ではござりませぬ憚り多き事ながら、私は近江の國志

賀ま申所の者、二歳の男子を鷲に取れ、我は其儘狂人ぞ成り所々方々ささまよふ内、此程淀の渡りにて乗合人の噂には、南都東大寺の良辨大僧正様は稚い時鷲に取れ助かり給ふ御方と、聞に付ても心の迷ひ、斯程尊き御方の我々づれの子ではないと思へど晴れぬ親心、どうぞ御慈悲に僧正の御身の素性御存じなら、お聞きなされて下さりませと、言ふも涙の雨やさめ、歎き頼むぞ哀れなり、件僧つく／＼、非人の體打詠めて、不審顔、チゝ成程々々おこご今物の語りも微塵違はぬ御上人様の御身分聞けば聞く程笑止な事、去ながら我等も毎日に御顔は拜せ共、なか／＼お傍へ出る事叶はず、先づ傍には御用人近習茶子性お取次、關白大臣御

攝家方、御目通りは白書院又黒書院
 對面所なか／＼近よる事ならず云
 てこなたの歎き、夫さばなしに餘所
 なから、お尋れ申すよい思案がコウ
 ット待しやれや、何ぞ工夫があれか
 しと、丸いあなたを右左り、ふり廻
 し丁と手を打ち、チ、思ひ出した、
 ）、扱も智慧かな、サア分別かな
 是より外に思案はないはい、エ、僧
 正様には御役目にて日々春日の御社
 へ御禮拜を遊ばすじや、其御下向に
 は二月堂お禮が濟めば其昔、驚に取
 ばれあやうくも楢にこまりし折も折
 前僧正の通り給ひ、お助け有し杉の
 木へ日毎に參詣遊ばす故、こなたの
 身の上をふして又驚に取られた我子
 の様子、委しく書てな、杉の木へ張
 付置ば、目にもこまらふ、モ是より

外に思案はないと、人を助ける出家
 にていご念頭に氣を付れば、老女は
 嬉しく手を仕へ、斯見苦しき老の身
 を不便と思し下されて、御親切なる
 御心添へ、有がたふ存じます、した
 が紙硯又筆の用意も有げこそ、元よ
 り老のよする浪、文字の分ちもやつ
 ればて、何をよすがに書留ん、心細
 さと打しほれ、歎けば伴僧打うなづ
 き、成程尤もげに斷り、ア、わしも
 思はぬか、り合、チ、よし／＼幸ひ
 矢立に紙も有、わしがこなたに成り
 かはり委しう書てやりましよと氣も
 わさ／＼と懐の紙に委細をさらさ
 らと筆に情をふくみ墨、書認めて手
 に渡し、ソレ今言た通り杉の木元
 へべつたりと随分お目にこまる様、
 張付て置つしやれ、しかしこう／＼

した坊主が書た教へたご必ず人に言
 ふまいぞ、エ、勿體ないお情受けた
 其上に、お世話に成り、死でも御恩
 は忘れませぬ、エ、有難ふござりま
 す／＼と、嬉し涙にくれん／＼も悦び
 勇めば、エ、何のいのふ、袖ふり逢
 も他生の縁、縁だにあらば又重れて
 おさらば／＼と伴僧が、引別れつゝ
 老の身の、心のやるせ竹杖に、力も
 なげにたど／＼と、二月堂さして歩
 み行く。

(床本) 二月堂の段

M 行かず共氣は燃なん春日野の三
 笠に遠き木の間より、いらか重れし
 二月堂、利益もふかき御佛の軒に見
 上ぐる葉も枝も、良辨杉と名に高き
 されば良辨僧正は、日毎／＼の御禮

二月堂の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤重 造

人形

供廻り大せい	先供大せい	弟子僧大せい	渚の方吉田文五郎	頁辨上人吉田榮三
--------	-------	--------	----------	----------

拜、早先共のせいし聲、網代の輿のおこそかに、近習の侍そば法師、かしづき随ひ、ゆうくく春日の社禮拜し、續いて御拜二月堂、品位も高き石垣やおひろいなる緋の衣錦の袈裟をかけまくも、實になつかしき杉木立、御手にかゝる露涙、水晶の玉さらくさ、いご殊勝なる御祈念、御手をさめて生茂る杉の梢をながめ給ひ、ハハ誠や、人界の生を受け、生長なすも父母の恩、夫に付ても我身の上、何國の誰が種成か、稚き時驚に取られ、此大木の梢の空小枝にさゝまり危ふくも、既に悪鳥の餌食にぞ、引裂れなん其折から、師の僧正の御情をうけ、命助り刺さへ、忝くも内裏にて、御宿方の助力を以て、成人なせしも師の厚恩

月日も既に三十歳の、今に父母ましますか、便りも聞ず音信も、なきは此世にましまさぬ、父母なれば未来のため、此世におはさば息災延命、何卒佛陀の妙助にて、一卜度逢せたひ給へど、年日頃祈れ共、そよこの風の便りさへ、涙の乾く隙もなく、烏にはんぼの孝もあり、鳩に三枝の禮も有る、我は闇路の玉よばひ生れぬ先の父母も、空なつかしさはかなさよさ、衣の袖にふりかゝる露の涙の玉散て餘所の見る目も痛はしき、僧正涙押拭ひ、何心なく木の元を見やり給へば、こまなく文字のあいろ白紙の書記せしに御不審ましく、テ心得ぬ、一方ならぬ此杉は石持て廻りに垣なす愛樹、誰か書物をばり置し、いご不審なり、兎も角

も書物はへそ仰の下り、はつと近習が差寄つて、手早く取て御前に恐入つてさし出す、僧正御手に取せ給ひ御心中にて繰返し、御不審顔にいかにも者共、此書物を張置しは何者成るぞ遠近に、心を付て尋れよと、仰に近習は手をつかへ、ハ、ハ、ハ、去候先程より此邊り、心を配り候へ共、人影迎も候はず、があれに一人見苦しき老女の非人罷り有る、彼より外に人もなし、そも何事の御尋と、申上れば大僧正、苦しからず、其非人はへくさ宣へば、人々顔を見合して、いかいと斗り立兼るを、僧正重ねて聲かけ給ひ、ホ、ハ、ハ、其方共が心遣ひ道理道理、さは去ながら常日頃今も語りし我身の上此書物に露いさゝか、尋問へき仔細有り、心な置

ぞ呼來れと、仰にはつと立上り、非人が前に歩み寄り、コリヤく非人にあれに御渡りましますは、忝なくも南都一、聖武帝の御歸依僧、東大寺良辨大僧正にて渡らせ給ふ、然るにいさ淺ましき其方に冥加至極の御詞かゝり、何角お尋の仔細有り、御前へ參れと權柄に云はれてはつと驚く老女、兼て覺悟も今更に、胸騒がれて兎や斯と、後ろ見らるゝ心にもなつかしさも先達てふるふ足元踏しめく、やうく杖に取總り、御前間近く蹲る、僧正御聲しとやかにそな者是へ、苦しからず近ふくすゝむべし、思ひむけなく呼出し、嘘迷惑に思ふで有ふ、其方一人此所に居合しくれ、ば幸ひなり、此書付を木の元に、張付置しを見留はせぬか

いかなる人か知らざるや、聞かまほしやと僧正の仰せにはつと頭を下げ流るゝ涙押し拭ひ、ハ、ハ、ハ、恐れながら其書付け、もし御目にもさまらふかと張付け置しは淺ましい、身の罪科を願す、此非人のげ、私でござりますと、云ふに僧正驚き給ひ、思はず御足を進ませ給ひ、此書付の表には、稚き男子を鷲にさらはれ、其子の行衛を長の年月、尋れあぐみし者ごやら、我身の上に似かよいし御身は何國の人成やと、仰せに老女は手をつかへ、申上るも面ぶせわらは事は其昔、宮家の舊臣水無瀬左近元治が、妻の落さ申す者、仔細有て勤仕を辭し、夫の所領近江の國古郷の志賀へ引歸り、夫婦が中に男子を設け、悦ぶ甲斐も情なや、夫は

病に此世を去り、忘れ篋のいとし子の、成人するを指折て、未の榮へを樂しむ内、頃しも卯月の茶摘時腰元はした打連れて、茶摘の手業野狹の遊び、時しもひみの山嵐、ごつご吹來る早ち風、比良の方より一文字、山鷲來つて我子を掴み、大空目がけ飛行をやらじと追へど鳥は早、霞に隠れ稚子の聲も幽に行方のなき悲しみに、そこはかこ、人目も何の形ふりも、後も姿も夢うつ、子故に闇に氣も亂れ、既に年月三十年、御覽の通り老の涙、頭に白く置霜の、影に氣の付水の面、亂れ心も納りて、古郷へ歸る淀川の渡りの船にて噂を聞き恐れ多くも、僧正の御身の上を承はり餘りよふ似た物語り、伺ひ申すも女の愚痴、子の行方に迷ひぬ

る身は野あらしのかいし共成果こがれ死る身を、不便と思したまはりて身の罪科を赦してたべ、まだ夢覺ぬあだ涙の狂女のくせご御赦しを人々よきにお執成、詫してたべごごふご伏し人目も恥す泣き居たる始終の様子聞こし召し、左こそご思し僧正も玉ちる露の御涙、老女が心、思ひやり、暫し詞もなかりしむ、やゝ有つて御目を拭ひ、そなたが今の物語り親子の恩愛ハア左こそ有ん、我身につまされ思ひやる、ア、嘸や父母上も、そなたの如く思し召し、迷ひ給はん勿体なや、餘所にな聞そいたましや、我身の様に思はれて、衣の袖を絞りしぞや、シテく其時稚子に後の印に成べきご思ふ品だに有るならば聞まほしやご有ければ、老女涙

の目を拭ひ、コハ勿体なき御仰せ、世にも似よりし御身並、冥加に餘る其お詞、譬へ此儘子の行衛、分らぬ逆も僧正の、情の御意に預りし、是を此世の思ひ出に、我子の纏、諦めても、證據の品も有ならばご又も迷ひぬる親心、そも淀川の渡りよりたどりくつて參る道、印に成べき品もやご思へご心定めなき、何をしようごのよすがにも亂れ心に黒髪も、枯野の霜さきへ果て月日の數も辨へぬ年月既に三十歳の、只何事も打忘れ今まだ夢の心地ぞや、思ひにせまり胸つぶれ、只湧出る涙より外に思案も、エ、出やらぬ、淺ましさをこふし轉び足摺してぞ泣居たる、僧正始め人々も、貰ひ涙に落草の露をましたる風情なり、老女ははつご起直り

こそ、かゝる聖を手に持し、母は勝れし果報者。無事に逢見る嬉しさに長の苦勞も忘れし思ひ、今は心も晴て行く、古郷の志賀へ立歸り、我も姿を墨染の、草の衣になき夫の跡念頃に申げん、御寺建立有迄はさらば

く立給へば、僧正驚き御袖の見るもいぶせき破衣を、兩の御手に引留給ひ、曇雲花増りの親子の對面、暫し成共良辨に、孝道立させ給はれど歎きたまへば人々々、しらぬ事達僧正の、御母君とは露知らず、無禮の段々幾重にも御赦し有て僧正の、仰の如お御寺へ一ト先御供仕らんこそすめ申せば今更に、長の年月あこがれし、我子のほたし人々々のすめも餘所に捨兼て、杖を力に立給へば、僧正御杖手にさり給ひ、其

御妾でおひるひ、後めたくも思されん、恐れながら此興へご仰せに母君驚き給ひ、アノ光丸殿、イヤ僧正様の、ホー、ホー、ホー、わつても

ない、いかに血筋さ云ひながら、勿體ない此興へ、ごふマア足む入れられう、ハア、赦したまへご辭しければ僧正涙に母君の顔つくく、見給ひて、ハア誠や住釋尊の、父大王の亡骸は、自興を昇ぎ給ふ、今良辨も母君の、御興を昇ぐべき行なりに、御身の穢を恥給ふは、皆是良辨がなせる罪、何卒御赦し蒙りて、此儘興へ御移りこ、人々立寄り、乗参らせ、痛はり、侍き僧正は御堂を見返りふし拜み、杉の梢も、雨露のおん、恩ま情の親心、恵みも深き二月堂、日頃の憂は木の元に、悦び榮

ふ孝の道影はれ出る、彌陀の慈悲、廻りく末の世に南都大佛乾の方子安の神と名に高き今に其名ぞかんばしき。



花競四季壽

花競四季壽

(床本) 花競四季壽

豊竹駒太夫
竹本相生太夫
豊竹つばめ太夫
竹本小春太夫
竹本源路太夫

豊竹駒尾太夫
竹本津磨太夫
竹本常子太夫
豊竹駒若太夫
鶴澤友次郎
竹澤園六
鶴澤友造
鶴澤友平
鶴澤友エ門若

景事として夙く文化六年二月の御
靈社内の芝居に上演せられておます
春は萬歳、夏は螢の汐汲、秋は關寺
小町、冬は鶯娘の四段返して優雅な
所作模様として初春にふさはしいも
のであります。

これは百四十年前に三代目鶴澤友次
郎(通稱松屋清七)師の作曲で其後
三代目野澤吉兵衛師が改訂をし五代
目友次郎師の時に至り毎年正月二日
一門相集り式三と共に弾くのが吉例
となり現六代目まで約六十年間の慣
例をひいたもので今日鶴澤宗家十種
の内にあげられてゐます。

まづ初春のあしたには、門に松立、
壽を祝ふ鬘斗目や、のし昆布、千
代と譲り葉あざやかに告げて行らん
鶯の聲も長閑き春のそら、實に九
重の、賑々々、いつまでつきぬ竹本
の其一節の世を込めて幾萬歳と祝ひけ
る。徳若に御萬歳と御代もさかへま
します、愛敬ありけるあら玉の年立
かへるあしたより水も若やぎ木の目
も咲き榮へけるは誠に目出度候け
る。やしよめく京の町のやしよめ
賣つたるものは何さ、大鯰小鯰の
大魚子鮑さしい蛤子く蛤々蛤
見さいなさ賣たる者はやしよめ、そ
こを打過側の棚見たれば金襴緞子、

人形

(鶴澤福太郎 鶴澤友太助 豊澤廣助)

男 萬 歳 吉田 玉 幸
 女 萬 歳 吉田 扇 太郎
 海 士 桐竹 紋 十郎
 海 女 吉田 文 五郎
 關 寺 小 町 吉田 榮 三
 鷺 娘 桐竹 紋 十郎

緋紗や緋縮緬、縞子縞縞子島縞子、し
 ゆちん色々、結構に鋳り立て候ひし
 が町々の小娘やお年の寄り施達まで
 賣かふ有様は、實にも納る御代なれ
 時なれ、惠方の御藏にすつしりく
 すつしりく、實も納る門には門
 松、瀬戸には瀬戸松、そつちもこつ
 ちも幾年の御祝ひと御代ぞ目出度、
 誰にか見せん澤邊なる、花紫の色
 深く蒼みを筆さ杜若卵の花月に移り
 うつらふ枝くくの、花ぞちりく塵
 塚に積りも氣色面白や、月雪花を手
 にふれて、いざ慰まん調かな、元來
 鼓は浪の音、千里も響くさつささ
 浪、女浪男浪が打寄くせいがい、
 立ち高浪、四海波どうく磯打
 つ浪にゆられもまれて、さらりく
 さらりく松の嵐か、月の出沙に

雲も追出て出てくるく、出てくる
 くくるくくく、うつや調の拍子に連
 て面白や、汐馴衣身にそへて、唐へ
 も運ぶ磯の浪、汐の満干にかるまで
 もなし、沖に漂ふ磯千鳥、思ひし事
 ばあだし野の露も消んと思ひしに、
 ふしぎの縁に逢初し、粹はそふした
 物かいな、それでも餘り津んくな
 エーく憎てらしい顔はいな、夕べ
 も今宵もいぞいんす、口舌しかけて
 いならでな、アレ又わしを泣そでな
 ぶでもかふでも逆しやせぬ、今は
 二人が吸付たばこ、きせるの煙り立
 登る、私の思ひは富士淺間登り詰て
 は、上もなき、ア沙の干潟にな、獨
 り鮑びの片思ひ、浪のよるくもナ
 浮名を流す、サイナくその心は
 あさり貝、片思ひ、浪のよるくも

ナ、浮名を流すサイナく、その心
はあさり貝、誰か我を止むらん、
此關寺の草の戸を明くれ昔戀しやこ
思ひし事も又昔なる、百年の姥が
身の恥かしやさて、市目笠おほふ日
影や吳竹の杖にすがりて、よろ／＼
く立出見れば逢坂の關の清水に
影うつる、老の姿のアーアー、
恥かしや、彼深草の少將の雨の降夜
もふらぬ夜も風の吹夜も吹かぬ夜も
思ひにきへし其報ひア、我實古へは
花の姿といはれしも、いつの間にか
は衰へて、生者必衰の理りは只目の
前と恐るしや、因果は廻り車のしや
に百夜通へど空言を誠とおもひつも
りしはさい生の山高く、生死の海深
き其怨念の添やらん、ケ様にももの
狂ふぞやう、つらふものは、世の中

の人の心の花や見る、餘所の見る目
は戀すりやゆかしいさしかはゆさが
それが、眞實ならば、そのナなん
く情けのそれが誠か、てんま誓文
二世三世、嬉しへ、ほんはくへ、
浮む中にさ樂しみ心付て身繕ひいざ
やまたつて、關寺の柴の庵りに歸り
けりく、忍ぶ山、口舌の種の戀風
が吹共傘に雪持て積る思ひは猶も幾
重か重る思ひちらす、外山の雪をく
ゆらす、炭釜に冬籠りせし一枝を春
待顔に初花の咲かけんまやちらく
ミ楢に宿る白鷺が霜毛を脱て羽た
きの、雪は花より花多き六つの花び
らちらりく、秋かざしてしほらしや
白雪のくはらへどく降りつもる
花と見紛ふ雪や氷を見ながらも袖を
かざして立寄ればそれは木々の花切

くべて樂まん、酒にいさや遊ぶらん
四季目前に有難や、雨土恵みの青人
草のく盡せぬ眺めぞ樂しけれ。



木下蔭狭間合戦

竹中若の段

竹中官兵衛若の段

中野竹本 文字大夫
野澤勝平
切竹本津太夫
鶴澤綱造

人形

腰四大小 樽齋竹左母娘
宮垣田下井藤藤中枝
源三春藤藤義兵大關千
元吾郎永吉太龍衛清路里
大吉吉桐吉吉吉吉吉吉
田田竹田田田田田田田
多玉政玉次玉榮太兵五
三幸龜松郎市三郎吉郎
い郎幸龜松郎市三郎吉郎

この淨瑠璃は寛政二年二月の初演で時大夫龍太夫が語つてゐます、作者は若竹笛朝、近松余七、並木千柳の合作、大体の筋合は、美濃齋藤家の

軍師竹中官兵衛重晴を主人公として今川義元の討たれた桶狭間の合戦に前田犬千代が奥局の芳野に通じて信長の勘氣を蒙つてゐるのを木下藤吉郎の執なしで桶狭間の戦功に面じ敏面されたといふ事さ、藤吉郎が竹中の閉居栗原山に赴いて師弟の契りを結んで洲股に隠退せしめた實説等を本にして左枝犬清が竹中の娘に忍んで子をうませ久吉が其子を母衣の中

に入れて桶狭間に戦ひ義龍が首を獲犬清は久吉の命をうけて其身を犠牲にして竹中を欺き、竹中は孫の恩愛にひかされて、栗原山へ隠退するといふ筋である。

(床本) 竹中官兵衛若の段 (中)

行そらの日影なれに西参河蜀の臥龍が八陣を爰にうつすや八ッ橋のやさしき詠め引かへて兵具逆茂木殿重に諸軍へしめす烽火臺、驛がしき世ぞ常なられ若を預る美濃の軍師竹中官兵衛重晴が忠義の操色かへぬ庭木の松も年經し枝に生立藤派も今を盛りに娘の千里、父は此程軍場より矢疵の惱みに引籠る御前遠慮もわたくしなき矢の根磨かせ鐵砲の筒のさらへを腰元共仇口まじり寄こぞり

中にも年倍しやべりのおすはこちの殿様此頃の合戦に大きな手柄なされたれど矢疵さやらで取籠つてござる故軍も暫し休じやげなそれにまあついまつや花結びなど取置てこちらまで此やうに仕付もせぬ軍の拵へしんきな事じやないかいのふ、それいふ、物堅い旦那様御家來衆もたんとあれど千里様やこちさまで女の遊びさすここがお嫌ひ故郷へ下つて溜々の掃除せぬかはりコレ見や握り心のよい此持筒磨き立た其矢の根大雁股さばチーホー、このもしい名でないかノフおすき殿チー嗜みや、御寮人様か聞いてござる、シタがあなたと言かはしなされた犬清様今度の軍お起つてから此お家は敵同志、只さへ隔たる美濃尾張も便りも乳ふつ、

かさぞかし戀しう思し召、おいさしばやま口々の噂も伽の内ならん、アコレさがない聲も高い母様はお留主なれど御病架へ聞へてはむつかしい静にいやく、犬清様と言かはしたは兩方軍の起らぬ前、子中なしてもし様のお赦しなれば文さへも秘し隠し任せぬ内に此騒動あまつさへ敵方の娘に固誤りさて春永様の勘氣さや聞度々になししい事共思ひやつてたもいのみ、打しほるれば、それ見やいの言ひ出さいでも大事ないこそ、御さげん直しに、アレアノ庭の藤の花お脉めなされてお心をおやく、お和らげなされませいと早口に笑ひ催す折からに奥様只今お歸りさしらせ程なく乗物つらせ、岩を假の屋敷風しづく歸る奥書院皆

の者大儀であつた、乗物はそこに置次で休めど下部を下らせチー千里待兼で有ふのふ、父御の氣しつを破らぬ様と腰元共さ兵具の掃除嘸長の日を退屈に思やらふイエー私し退屈より母様はお勞れてござりませふそしてまあ御前のお首尾宛や角さ父上にもお待兼そふあるふ、母も氣はせいたれど隙取た咄しは後で歸りしやうすを腰元共おしらせ申せさ人を除、さし寄て小聲になり折もなご思ふたが是までも此母はしるまいご思やしふが二年餘り以前からそなたさ左枝犬清殿言かはしていやらふがのエーそんならお前は其譯をチー知てある、湯治の譯も何もかもしらす顔は父御の手前互ひに好合した中ならば國ならびの小田殿へ表向から

結納て養子蟹に貫はふと思ふて居る
内兩家の争ひ此岩へ移つてより逢れ
ぬ事を苦にやんで顔も細れば幾世の
案じ兎角頼みは神の力さ歸りむけに
熱田のお宮へ参詣し何こそ兩家和睦
遊ばしそなたの願ひも叶ふやうさく
れんお頼み申上た其御利生で思は
ずも不思議にけふ晝手に入たわしが
土産はアレアノ乗物明て言はぬ心
の秘事、聖も捨ぬ戀の道つも事共
何やかやノ母は奥へミタぐれてかす
かにひやく入相と俱に一間へ立て行
く早黄昏て燈す火の眞實眞身母親の
詞の謎もさげかぬる日影の氷文さへ
もまたへし思ひ犬清が乗物の戸を忍
ばしく明て出る顔見合す顔ヤア犬清
殿か千里殿夢ではないかさまるびお
り、戀しい事の數々は胸につもれど

詞には言つくされぬ憂事の餘る涙ぞ
やるせなき春撫さすり道理々々親々
の目を忍びぶさ言かはせし二人が中
不慮の御勘氣詮方なく漂泊の中ふし
ぎにもそなたの母御關路殿に御目
かゝり存じかけなふ此岩へ伴なはれ
しも盡せぬ縁さりながら春永公へ訛
も叶はず所詮二人が身の終り軍の縁
の切れ目ぞと聞に千里は氣も消て國
と國とは隔たれどにしなりやこそ
深ふなり、たまの逢瀬も眞實に情の
胤をお胎に妊し人目忍んで漸と産落
したる清松も顔見る事も泣明しそれ
さへあるにあじきない二人が縁の切
目さはお前ばかりが切氣でも思ひ切
れぬ片そぎの契りに嘘はないものを
頼みがたないおの様さ恨みかこつぞ
はりなけれ、理にせめられて犬清

も何と答へも中仕切り 襖隔て打し
はぶく聲に驚き犬清に噓きく椽の
下忍ばす月の葉隠れや染ぬ紅葉を顔
にたく心の内こそせつなけれ。

（床本） 竹中岩の段

内こそ切なけれ、曲れる枝を直
きに挽め、木は木と分くる竹中官兵
衛重晴。手傷に屈せぬ丈夫の顔色、
刀を杖に立出づれば、柿々ながら娘
は差寄り。詞と曇きは申しなが
ら、風が當れば、御養生の支障、御
用も有れば御病架へ、何故お呼び遊
ばしませぬ。ナニサ、拳未熟の
弱敵原が鎧矢、是しきの微傷、いつ
かな屈せぬ某なれども、強て保養
仕れその主命、よんどころなく引
籠り居る折を窺ひ、親も許さぬ密會

不届至極の女郎め。縁の下に這屈む色に寄り来る煩惱の、犬清さは名に相應。サア爰へ出よ童奴と、言はれて二人は氣も消えん、言合されど一時に、汚の滞なす心地せり。思案極めて犬清は、目通りへつゝと出で詞御存知の上は包むに及ばず、敵々こ隔てし中、御目を掠めし此身の不義、お手討は覺悟の前、抵抗致さぬ御存分と兩腰ぐわらりと投出す命、悪びれもせず座を占むれば、驚りて見遣り。ハテ健氣の一言、助け置かば、一方の攻口持兼ねまじき若者、春永に勘當受けしは幸ひ、義龍公に奉公し、官兵衛が婢さならば、小田が家にて莫大の、所領に勝る武名の譽れ否か、應か、サア分別して返答せよと、和ぐ言葉に千里はいそぐ

詞今迄案じた父様の御機嫌直り、女夫にさせうさは夢ではないか。コレ申し思案所か、お受け申して下さんせ。やいのくしごも無き娘心ぞ道理なる。犬清は只黙念と、暫し言葉も無かりしが、以前に手に入る笠印、懷中より取出だし。詞平家支流の春永公へ仕ふる故、濃紅の某が笠印に、望むらくは官兵衛殿の姓名を書記し、春永旗下の武士となしたき我念願、御所存如何にさ、云はせも立てず、ム、當時尾濃兩國に於て此竹中に左程の事、云はんす者覺え無い、一器量有る底意の程、尋ね問ふべき仔細有り、ヤイ娘、用有らば手を鳴らさん、次へ立てよと會釋無き、父の言葉に否應も、云はれず云はぬ夫にさへ、心を奥へ立つて行く

跡打見遣り聲を潜め、詞若年ながら音に聞いたる左枝犬清、色に引かれて此岩へ入來らんやう有るまじ、所存包ます物語らば、告むるは武士の表、娘の縁に繋がる、其方、一方なられば心置かず、我存念も言聞かさん。イザ先ず是へと睡じく、初に變る重晴も、言葉に辭する色目無く、上の書院の縁者と縁者因も厚き式臺に、作法正しく座に直る。犬清威儀をかき繕ひ。詞御賢察の如く此岩へ入込みしは、全く息女の色香に迷ふ某ならず、折入つて官兵衛殿へ、頼入れたき一大事と、言はんせしが四邊を見廻し。詞戦國の人心、迂濶に口外なし難き密談、御推察下されよと、ためらふ氣色見て取る重晴詞尤もさこそあるべき事、他言せま

じ勇者の潔白、唯今見せん最前の
筈拔取り庭先の、松の枝傳ふ藤葛の
花を目前にはつしと打つ、手練に落
散る紫藤の英、犬清屹度打守り、
詞ム、赤色は小田の旗色、朱を奪ふ
紫は、武勇鋭き齋藤氏、性は即ち
アノ藤原、落花枝に歸らざる官兵衛
殿の花の金打、底意も知れて安堵の
上は、様子包す申上げん。詞扱も去
る天文十九年の頃よりも、蝸牛と争
ふ小田、齋藤、遂に執合ふ于戈の動
き。去年の冬より領地の境、洲股川
に對陣し、勝負は互角と見えたる所
貴殿の下知にて美濃路の兵、此三
洲より取圍み、鷲津丸根を始めとし
て味方の砦を打破られ、残るは丹下
中島兩所、詞爰ぞ主人の御陣所なれ
ど、矢種兵糧玉薬も、至つて乏しき

小勢なれば、敵の多勢に比べては、
應に玉子を打つが如し。一ツの頼み
は官兵衛殿、何卒主君春永に、御味
方下さらば、百萬騎の勇兵にもおさ
らく劣らぬ貴殿の軍略、御許容願ひ
奉るこ、退つて頭を下ければ、詞
ム、スリヤ春永は小勢にて、丹下の
砦に籠り居るこな、サ、其御主人へ
犬清む、勘當御免の願の綱、結ぶか
切るかは足下の胸中。ム、ウ、智勇
兼備の名將と、聞きしに違ふ春永が
度々の敗軍、必定奇計や有らんかこ
心迷ふて主人の出馬を留めしが、味
方の銳氣に聞怯ちして、敵勢過半落
失せたる、兩所の砦は空城同然、今
こそ疑念散じたり、防戦の用意せよ
者共やつと呼ばはる聲、思ひも寄り
れば母姫共に馳出で。ヤア何事、詞

出勤御免の御病中。防ぎの用意と仰
るは。チ、敵の空虚を義龍公の本陣
へ、告報せん支度じやわい。ヤア
くくスリヤ最前の花の金打、謀
計であつたよな。チ、兩家雌雄を争
ふ時節表裏の金打眞と思ふか。何ぞ
や娘も縁に頼り、我を味方に付けん
さば、猪小才な小童と、見透す如く
官兵衛が、一句に逆立つ無念の齒
み。詞主君の勘氣救されんこ、一圖
に逸つて味方の大事、我舌頭に引出
だせし小田の滅亡今此時。へエ、是
非も無や口惜しや、犬清が一世の不
覺、恨の鋒先受取れこ、すはと抜い
て駈向ふ。中を隔つる女房關路。マ
アく待つてこ身も惜します。總り
千里を突退け勿れ退け、斬込む刀を
透さぬ重晴。殺して利腕しつかと執

り。詞手傷は負へども汝等が、手に及ぶべき某ならず、命は助くる早歸れど、刀奪つて遙に投退け。詞味方へ示す相圖の狼煙、報せはかうと件白及。目當は庭先烽火臺、丁と投ぐれば筒口へ、石火うつると見えたるが、狼煙空に立昇り、残る皆も一時に合す煙は豫ての要害、手筈を見るより、南無三寶、最う是迄と犬清は、差添逆手に弓手の脇腹、ぐつと突込む必死の深傷。嘯悲しやと千里は駈寄り、餘り我強い父様の、お心一つで此最後、母様しやうは無い事か、と、絶り歎けば母親も、詞手道理ぢやく、日頃戀しい床しいと案じ暮せし其方がいとさぞ。夫に引換へ官兵衛殿、可愛い娘に連添へば舞は子じやないかいの。武士の意氣

地が立てないさて。見殺しにする無得心、哀を知るは武士の、常に引換へ胸怒さ、恨み歎くを耳にもかけず忠義に凝つたる氣丈の老人、腸を練る軍慮の工夫。詞ム、五星を鑿みれば、味方は北方坎爲水、時は三更子の上刻、水に水を重ねれば、南方の火の尾州を討つに利ある刻限、君の御出馬此圖を外さず、イザ本陣へ乗換引けと、下知する内に一間より詞ヤア、官兵衛。病中の苦勞に及ぼす、齋藤治部大夫義龍、疾よりはにて聞きたるぞ、襖さつと押開かせ、江戸黒革織の鎧投懸け、繁金物のさつばい兜、花に荒れたる走馬の勢ひ、前後を守護する諸軍勢、四邊を拂つて見えたる有様、存じ懸無きお成やと、低頭平身なしければ、義

龍快此の聲高く。詞 鋭き味方の鋒先にて、過半攻取る敵の要害、残りし岩は丹下中島、只一戦に攻崩さんと進む手勢を其方一人、遮つて留めしは、犬清めが内縁に引かれ、二心や有らんか、密かに立越の窺ふ所、敵の空虚を計知つたる臨機應變、今に始めぬ竹中官兵衛。疑ひ晴る、上からは、短兵急に押寄せて、春永か頭を得る今宵の一戦。ハ、ハ、ハ、快よや、併げしと、我慢に暮る強氣の言葉、官兵衛猶も恐入り。詞何でう娘む愛に溺れ、義心をかいて忘るべき戰場の働きこそ叶はずとも、御供御赦免下さるべし、イヤサ、手傷も未だ治せざる内、心勞は保養の妨げ、岩に残つて勝利の報せ相待居よ、時刻移さず出陣せん、いそうれ

續けど勇立ち、首途を告ぐる鬨の聲
手勢從へ出て給ふ、跡見送つて官兵
衛重晴。詞主人の疑ひ散ぜし上は、
今こそ赦す犬清さ、未來を契る水
盃。女房宜きに計へこ、思懸なき
一言に。詞エーそりや眞實でござん
すかへ、チ、不惑の生害、見控つる
も武士の誠忠、義心は義心、恩愛は
恩愛、ソレ、早くと情有る、夫の
心酌み取りし、柄酌の長柄短夜、
月の満ちも幾千里、手に取上げて親
々の、情戴く水盃。詞申し我夫
今といふ今お許し受けた二世の固め
未來は女夫でござんすぞへ。チ、
悲しい目出度い取結び、酌は此
母、手負には忌物なれど、娘が心濁
り無い柄杓の盃、手を懸けて下さ
らば儀式は濟む、サア、早う犬清

殿。ヤア祝言さば穢けしい、目前主
人の仇敵。竹中が娘の千里、盡未來
際夫婦の縁、斷つたる證は此通りさ
柄杓搦んで投付くれげ。詞エー爾ん
なら私が未來の縁は、チ、言葉交す
も是限りさ、烈しき手負が言葉のこ
がり矢、取るより早く我さ我が、咽
喉にがげと突立つる。母は駈寄り狂
氣の如く、詞此變事を見まい爲、盡
した心も徒事に、成果てたるが悲し
しき目を開らき。詞ア思へば果敢な
い私が身の上、此世の縁こそ薄くこ
も、せめて未來は蓮葉の、玉の臺へ
夫來にぞ樂しんだ効も無う、お主大
事と父様の、忠義の刃金に情無や、
二世の縁さへ斷切りし、心の中の悲
しさを、推量して下さんせ、迷ふわ

いなまごばかりにて、涙の血沙争へり
折柄風が吹送る、貝鉦の音寄せ太鼓
さも物凄く聞えけり。詞官兵衛は耳
聳て、遙に聞ゆる人馬の物音、はや
合戦と覺えたり、勝負は如何にこ心
急き、見遣る外面へ物見の軍卒、大
垣三郎御注進さ呼ばはり、勝利
を報する勇みの大音。詞扱も味方の
三萬餘騎、二手に分つて中島の、柴
田佐久間が固めし砦へ、ひた／＼
くぞ押寄せ、鬨を作つて攻か
くれば、外見ばかりの旗差物、不勢
の小田方狼狽眼、詞鬼さ呼ばれし柴
田を始め、井柙、遠山、森、佐久間
柵を潜つて八方へ、逃がしは立てじ
ぞ追詰め、春永も後詰せし、丹
下の砦を一挫ぎ、味方は破竹の勢
にて、未だ合戦最中なれども十分勝

利疑無しと申し捨て、ぞ引退す。詞
 ム、味方の手番よくしたり、ハテ心
 地良き報せよな。哨官兵衛殿、一旦
 の味方の勝利と有れば、お前の忠義
 も立つた道理、此上の願ひは、理を
 非に曲げても小田方へ、お味方あら
 ば犬清殿、娘と未來の縁も断らず、
 せめては清い臨終を、勧めるが親の
 慈悲。ヤア姦しい二心を抱たく所存
 有らば、彼奴等を眼前見殺しすべき
 か、主家より賜る高祿にて、身體髪
 膚を養へば、親子の命は主君の物、
 無益の繰言聞く耳無い。黙り居らう
 と愛想なき、夫の言葉にわつと泣き
 ソレ其意地強いお心わ、劍となつて
 可愛げに苔の花を二人まで、散らす
 が親の慈悲かいなう。子よりも可愛
 い初孫の、有りまは聞けど顔さへも

知らずに暮すばかりかは、詞月日も
 更へす一時に、孤兒さなすもぎど
 は、親子夫婦が修羅道の、呵責の種
 となつたかこ、夫に恨みの數々を、
 數へ立てたる八ッ橋も、涙ちまたの
 三河路や、澤邊の水も増すやらん。
 程も荒砂踏立てく。息を切つて駈
 來る注進。詞官兵衛見るより。如何
 に藤太、愈々味方の勝利なるや。さ
 ん候初度の戦、勝に乗つたる味方
 の勢、蕪地に追駈くれば、逃げたこ
 見えし敵の術、場所好き所に引返
 し、詞初に變つて柴田が強勢、必死
 と定めし切鋒に、味方も亂次に喰留
 められ、桶狭間に屯有る。義龍公の
 御陣の勢、追々に駈付けく、先手
 に加はる虚を窺ひ山道險しき挟間よ
 り、詞君の御陣の後を目懸け、思ひ

寄らざる小田春永、諸卒を隨へ現れ
 出で、所々の砦を餌に飼ひ、敗色見
 せしを術と知らず、死地に入つたる
 大將義龍、討取れ射取れと下知に連
 れ、群り蒐るを近習の兵、動き戦
 そ、其中に、敵勢より母衣武者一人、
 眞先に大音上。詞春永の御内に左る
 者在りと呼れたる、左枝犬清是に在
 り、義龍公の御首級、イテ賜らんこ
 言ふより早く、槍を捻つて飛鳥の如
 く、突伏せ難伏せ瞬く内、頼切つた
 る味方の人々、唯一人に斬立てられ
 手負討死死人の山、人間業と見え
 申さずさ、大息つて物語れば。詞
 ハア扱こそ小田が謀計に、陥り給
 ふか氣遣はし。夫のみならず春永も
 馬前に働らく大清とば、訝しく。シ
 テ主君には別條無きや。さればく

斯く亂軍なる上は、主人の生死覺
束なし、御先途見届け奉らんご、
元來し道へ駈り行く。物に動ぜぬ竹
中も、始めて吐息つき致へす。詞ス
リヤ若者が切腹も苦肉の術で有つた
よな。チ、推量の通り、味方空虚と
偽りしは、まづ此如く義龍を、おび
き寄せて討取らんす、是皆軍師久吉
の計略、今さいふ今犬清が、お役に
立つたる此切腹。ア、嬉しや本望や
ご、聞く度々に急立つ官兵衛。詞チ
エ口惜しやナア、重晴程の弓取が、
鼠輩の族に計れしか、心許無き主人
の存亡、駈付け救ひ奉らん、女房
物具々々、エ、不吉の吠面思しいご
足踏こたへ鏡櫃、手は掛けながらよ
ろくく、氣は逸れども手傷の惱
み、透進ひく緋先へ、立つては倒

けつ居ては轉び、心臓げば咳き上し
矢傷破れて迸る、血汐の眼背目も
紅、又打立つる引鐘に、伴れて駈
來る四の宮源吾、朱になつて立歸り
詞エ、是非も無き御運の末、計略に
陥つて、諸卒も殘らず討死し、御大
將義龍公、手痛く働き給へども、敵
勢銳き挾間の圍、遁れん方無く犬清
が、及の下に御落命。大崩れして士
卒も散り散り、陣所々々も敵に奪は
れ、殘る若ば此一ヶ所。御油斷有る
な官兵衛殿ご、云ふ聲もはや息斷れ
し、其儘其處に倒れ伏す。詞ハ、ア
天なる哉、命なる哉、多年の計策一
時に破れ、主家の滅亡今日只今、斯
かる大事を引出だせし、根ざしはう
ぬ等ご這寄りく、兩手に二人が頸
髪掴み、ぐつと引寄せ。詞 五十年來

不覺を取らぬ官兵衛に、能くも恥辱
を取らせたなア。主君の怨敵國賊奴
ご、捻付けく齒きしめ齒がみ、怒
る眉毛も逆立つ肝辭、五臟六腑を嘔
上げて、拳に傳ふ血の涙、止め兼ね
てぞ見えにける、時しも爰に寄太鼓
亂調に打立てく、小田上總介春永
勇名輝く其扮裝、欣然ご入給へば、
夫ご見るより無念の息ざし、飛菟ら
んす氣の逸雄、義心を察して春永公
詞ヤレ驅がれそ竹中氏、齋藤道三を
毒殺し、勿体無くも足利の、四海を
奪はん義龍が陰謀。其身の敵は其身
の積悪。誰をか恨み敵させん。元よ
り齋藤旗下の貴殿、譜代恩顧さいふ
にもあられば、我軍衛の師範ごなり
政事を助け、國民を哀れむこそ眞の
義者、有無の返答せられよご、道理

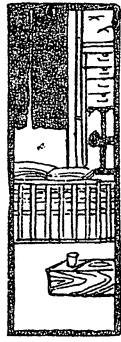
に服せず嘲笑ひ。詞ヤア無益の舌客
 千變萬化に理は説けども、眼前主君
 の仇敵、爰に來たるは火に入る蟲、
 素首取らん急立つたり。詞ヤア
 官兵衛、義龍も首取つたる當の
 敵、左枝犬清見參せんぞ、槍引提げ
 て驅來る母衣武者、歩み寄つて煩當
 兜、かなぐり取れば此下當吉、御前
 に向ひ、謹んで。詞此久吉が下知に
 隨ひ、敵地に入つて命を落し、謀
 を行ひしは、彼れなる犬清、又戰場
 にて義龍を討取り、武功を現す犬清
 は、即ち是にに槍投捨て、母衣絹取
 れば春負いし稚子。ヤア清松かこ手
 負の千里、寄るも寄られぬ深傷の苦
 痛、母も心根思ひ遣り、千々に亂る
 胸の糸。久吉重れて。詞此稚子の
 犬清に、御勘氣御赦免下さらば、我

等も加増の君恩にも、遙に勝る御仁
 惠ま、思入つてぞ願ひたる。大將莞
 爾と打笑給ひ。詞ホ、チ一名二人稀
 代の犬清、死しての忠臣、生きての
 勳功、能く勤めたり出かしたり、進
 退烈しき戰場にて、快げなる瘦顔
 の様、天晴大勇頼みあり、今ぞ勘當
 赦すぞと、慈愛の言葉に久吉初め、
 痛手を忘るゝ手負の悦び。心を察し
 て御大將。詞未來へ赴く犬清へ、恩
 賞させんすソレ久吉。ハツト答へて
 母衣絹に包し首、故實を正し差置け
 ば。詞ヤア是こそ主君義龍公の御首
 級。エ、淺ましい御有様、犬清に恩
 賞まは、我に贈つて情をかけ、勇氣
 を挫かん結構よな、愈々襟懐重る春
 永、覺悟ひろげと詰寄れば、ヤア粗
 忽。當の敵は此久吉も負ふたる

犬清。サア討て竹中。チ、云ふにや
 及ぶと、すらり引抜き振上ぐる、
 白刃の光に身を惜まず、サアく
 く突付ける、騎す及の下筋に、
 紛ふばかりのしよばく髪、すや
 く寝入る稚子は、舞や娘も面ざし
 に、にたく顔の愛盛り、思はず見
 されて。詞ハテ好い子だなア。孫と
 祖父とが初見參、産着の一重も呉れ
 もせず、邪慳に振りし及の下、嘸恐
 しき夢や見ん、不惑の孫も寝姿や。
 現在娘の別れにも、涙一滴こぼさぬ
 官兵衛、義に張詰めし強弓も、血の
 緒の弦に折れたひか、扱可愛やと大
 聲上げ、勇氣挫けて身も顛ひ、刀持
 つ手は大礮石、鐵丸の如き魂も、
 今ぞ蕩けてはらくく、止め兼ね
 たる恩愛の、涙汲出す如くなり。犬

清莞爾と打笑ひ。詞久吉殿の高恩に
て、御勘氣御免ある上は、思ひ置く
事少しも無し、今こそ女房、舅殿、
仇も恨みも是迄々々。お暇申すこ、
突込む刀引廻す。久吉暫しと押留め
詞孤兒となる此清松、某が守育て
生先目出度き榮を見せんと、抱上げ
たる後紐、蜻蛉結びも秋津國、合四
海に覆ふ木の下の、露の恵に生育つ
ウタ いんのこくく合いんのこやいん
のこ、いのこくくば犬清が、残す嫩
の末の代に、左枝政左衛門時家と、
名に知られたる弓取は、此稚子の事
なりける、官兵衛數行の涙を押へ。
詞敵ながら情有る、小田に及向ふ弓
矢は無し、我は是より女房諸共、栗
原山の閑居に籠り、主君を始め筆娘
が、菩提を弔はん。いざ去らば。詞

チ、此大清も近づく知死期。我君お
さらば。孰もさらば。さらばくの
聲轟ふ。臨終の娘を母親が、未來の
道連はぐれぬやう、頼むくも泣い
じやくり。哀を見捨つる御凱陣。詞
義龍亡びし上からは、不日に都へ上
洛し、管領三好長慶が、底意を探ら
ん此下當吉。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、仰
せにや及ぶべき、時日に移させ奇計
をなさんさ、聲も清州へ御凱陣、餘
所に見送る竹中夫婦、二人が末期一
時に、小田の旗色茜さす、期日眩き
鎧の袖、綺羅一天に輝かず、武名の
程こそ三重類無き。



紙屋内の段

中 野澤吉左
野澤吉左
切 竹本鏡太夫
野澤吉左
野澤吉左
野澤吉左

人形

紙屋 治兵衛
粉屋 孫右衛門
娘 お末
おさんの 母
女房 おさん
紀の國屋 小春
男 五左衛門
丁稚 三五郎
五貫屋 善六
江戸屋 太兵衛
勘 太郎

桐竹政龜
吉田玉次郎
吉田榮之助
吉田玉七
吉田文五郎
桐竹紋十郎
桐竹門造
吉田榮三郎
吉田文之助
吉田玉徳
吉田文枝

心中天網島

紙屋内の段

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作と謳はるゝ名作で享保五年十月十五日の明け方大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすゞさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので以來心中物の白眉とされてゐます、天満の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら曾根崎の紀の國屋小春と深く契ります。兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍妾に身を扮し河庄に到り小春に遭ひ二人の仲を割かさうと折から一ト目でも小春に會ひに来た治兵衛にも意見を加へます。小春は女房のおさんの依頼の

状によつて義理に挟まれ心ない愛想づかしをいひます。治兵衛の戀敵大兵衛が小春を身請けするこの噂を聞いておさんは衣類を質入してまで所要の金を融通し、治兵衛に顔を立てさせんさします。舅五左衛門はこの体を見ておさんを連れ歸ります。治兵衛は小春と網島大長寺へ往き情死を遂げるといふ義理と愛に涙を絞る世話物の粹であります。

(床本) 紙屋内の段

福徳に天満神の名を直に、天神橋を行通ふ、所も神の御前町いとなむ業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付けて早振程買に来る、神は正直商賈は、所からなりしにせなり日脚も傾くまかり辻、横町から身すがら太兵衛、

ア、治兵衛殿内にか、イヤ内にそふ
な、サア金受取らふ、こんな贖金は
入らぬ、正眞の金返して貰はふサ、
今戻せ〜こ上り口に大あぐら、ヤ
コレ、太兵衛そりや何云ふのじや、
全体宛名の違ふた金、覚えなければ
其場の張合、お侍の世話で二十兩は
濟したじやないか、が其時貴様改め
たじやないか、サイノ、二十兩に違
ひはないがマよふ似た正眞には見ゆ
れど、一兩も遣はれぬ、コ、是を
見や、ヤモさんその胴脈けさ問屋の
仕切にやつたら、贖金の尻が破て、此
太兵衛迄が疑はれるわい、治兵衛悪
いぞや〜エ組伊國屋の小春さ、く
さりついた二人が仲、揚代にせがま
れ、ソレ貴様ぎりば〜して居た
おれが性としてイヤモ氣の毒でなら

ぬじやによつて、取替てやつた貳拾
兩、ハアこりや何か侍め云ひ合
せ、此太兵衛をやつたのぢやな、イ
ヤサやつたのじやなア〜マめ
んよふ合點の行ぬぢぶじやと思ふた
ごいづもこいづも悪いやつらじやな
サア其侍に逢ふ、治兵衛かたりめ
を爰へ出せと、そこらあたりへ當り
眼、コレ太兵衛殿お侍には及ばぬ、
一体この貳拾兩は清水の浮無瀬で石
町の隠居坊主に思ひも寄らず借つた
金、名宛を白紙でやつたが誤り、が
太兵衛といふ名宛ではサア借らぬ物
がなせ返した、イヤイヤノ、コレ、
贖金で返せといふ、相對はせんぞよ
こんな恐ろしい言事せずと、五器提
ておれが門へ立てやい、ヘーン江戸
屋の太兵衛は大金持ちやわい、臺所

の餘り物犬の五器の分でも四五人は
樂に喰へるわい、エ、こんな事すな
やいと、足で躡返す贖金の、包も切
れる腹立涙、ム、そうぢや石町の
借座敷隠居坊主さいふたも曲者、引
ずつて来て面張れさかけ出すを、女
房引留めア、コレ、治兵衛様も是程
に手を替て仕込んに仕込んだ悪だく
み、石町の借座敷に、今迄何のうか
〜居やう、コレ氣をしづめて下さ
んせさいはれて、詮方なく計り、途
方にくれたる折からに、くれぬ門で
もこぢつけるちよんがれ坊主の錫杖
ふり立エ、歸妙頂禮ごうが如來さん
ま、ヤレ〜皆様聞いてもくんな、
あまりかつへて向ひ皆様ちよつさゝ
たれば後生願ひでお前の内からくわ
つ〜後光がコリヤ、又あんたる

うるさい事じやに。パイくくく
 くくくエ、時も時さあた聞ともな
 い、返りやくくヤレくくくけんご
 な、かみさん、けんくくいばすこ、
 おらが顔見て御亭主く我等か顔を
 ばちよつと御覽じく。ちよつくら
 ちよつと、御覽じ、何ぞ思案の種に
 もなるかい、パイくくくくヤア
 わりや此間の坊主め、よううせたな
 アミ走り寄り、胸倉さつて引居れば
 マ、コレく親方くコリヤどうす
 るのじやくく私ば長町の乞食坊主、
 夫を内へ引ずりこんでエ、聞へ
 た、コリヤ何かへ内で諷はして聞く
 氣かへ、ム、諷ひませふくへん
 くくく是ば此頃大評判色里も
 つばらちよんがれ節、新物のコレ始
 りくヤレくくくエ、歸命頂禮お

かたさんやんれ、ヤレくくく皆様
 聞いてもくんさい、花の難波の新地
 の小春に貧乏紙屋の治兵衛かなづん
 で悪性通ひの杉原紙で節季は断り仕
 切はのべ、紙得意は塵紙若い美濃紙
 内にや小牛紙一そくならず二束三文
 にまけてしまつたハ、着類きそ
 げも茄子の淺漬ぬかみそ臭い、内の
 お嬢にやあいそもこつそり、盆も正
 月も小春が方へ忍び紙さばコリヤ又
 あんたるうるさいこつた、笑止なこ
 つだにちよんがれもんがれくく
 ファイくくくファイくくくやれく
 くくおやま狂ひに男はねれ紙小春は
 青土佐、内儀はけつこな阿房のか、
 紙、是も今橋うはさの書置、唯へま
 したるちよんがれ坊主も元は随分お
 さなしもんだが浮世捨たるすんべら

ぼうのぼんぼうく坊主も軋れて
 が、折ました、パイくく、フウプル
 くくくくヤイくくそりや客さ偽
 り、小春を浮無瀬へ連れて来て、石町
 の坊主客になり、我難儀を見て貳拾
 兩さいふ金をかし、宛名に及ばぬこ
 白紙の一札も頼もしそふに取つて置
 き思ひもよらぬ名宛は太兵衛、よふ
 もくくくたくなんだな、有り様にサア
 ぬかせ、と取付くをふり放しエ、コ
 く、親方く下地の破れに又破る
 はいのム、衣が、何と云はんす、此
 わしに、二十兩の金借つた、ム、
 イヤこいつは受目じやわい、ハ、
 一サアそんなら返して貰はふく
 くマ、何ちやいけつたの悪い、
 宿なしのちよんがれ坊主をつかまえ
 て、覺えもない貸主呼ばり、エ、返

したか返せ、貸た覺はこんせんぞき
鼻も動かぬ白化しらにせ、亂れれだ
れの腕まくり、はせる衣のどぶ色も
破れかぶれと見えにける、太兵衛氣
味よく尻打叩き、コリヤ治兵衛、せ
りふが濟んだら金返せ、但し代官所
へ行たいかアノ爰な泥棒めさ、立蹴
にどうと蹴られても證據なければ無
念をこらへ、拳貫く齒きしみ齒ぎり
スリヤどうあつても此治兵衛をム
代官所へ引ずつて行くサアくくく
うせいと取にかゝる二人を突のけ走
りかゝつて戸棚の脇差拔んとす、駈
け寄りおさん抱き留めム、道理ぢや
くがマア待て下さんせ、お前が短
氣な事をして、跡に残つた二人の子
供、私は何さなるぞいの、ア、イヤ
くく放せくく逆立半亂、治兵

衛待早まるなと奥より出る孫右衛門
脇ざしをもぎ取て、最前から何も彼
も皆聞いた、此場て太兵衛どんとや
らと、アノ坊主めと打放しや二十兩
の白紙の譯が立かよ、ソレ其様に腹
立させ、疵付させて事にする仕打は
これまで何ぼうも有事ぢやわい、夫
でもあんまり、サアよいと事おれに
任しやくハテマア下にぬやいの、
ソレおさんこの脇差を戸棚へさ、落
付く詞に落付くおさん、天の岩戸の
戸棚へ錠マどう濟む事ぞ常男の胸
はもた付く其所へ小春が親方紀伊國
屋才兵衛内を覗いてヘエ、御免やす
一寸お尋ね申します、内方に江戸屋
太兵衛様、江戸太様はお出なすてや
ござりませんか、もいたつてほんホ
コくさいお人ム、太兵衛様爰に

かいな、モ一遍と尋た、お前はマア
ぬつべりとした顔付、コレよふ駈落
をさしたの、サア此二十兩返します
が埋だ小春を出して貰ふ、ヤイく
く才兵衛くわりやマアれさぼけ
ては居ぬかよ、ソリヤ一體何の事ぢ
やい、エ何の事くこはテモマあつ
かましい、代物じや、きつとした證
據がござんすハイ書置があるわいの
書置がサアくは讀んで見やんせさ
太兵衛が側へ突付れば何さいふ、ス
リヤは見りや知れるかい、小春が書
置さぬかしや、マごごその胸にこた
へふさ、したり顔に押開き、エ、何
々恥しながら書殘し候は迄厚ふお
世話になり候身に候へ共いごしい
お人の顔たち申さず、是非なく駈落
致しまぬらせ候エ、いまくしいげ

んさいめじやなア、今迄紙治様ぞ深
 ぶお云ひかはし深ふくへー、深
 ぶお云かはし遊ばしたのこー、エ
 何じや今迄紙治さんぞ深ふ云ひかは
 せしはマ、待よ、せしはくじやち
 つさけつたいなぜエ、深ふいひかは
 せしは皆嘘にて候ヤアくくく
 くアハ、誠ばほんまに太兵衛
 様が可愛くにて候ムくくく
 く傳海、貴様アノ太兵衛様さいふ
 客知つて居るか、待なばれや、何
 でもまう聞いた様な名じやかエ、こ
 ふつと太兵衛様くナア太兵衛様ム
 イア返事して居るお前ぢやがな、
 ム、ほんに私かいな、えらいおかし
 いなアホ、いしかしマアそんな
 ら其氣で楽しんで讀にやならぬ、エ、
 どころやらじやナツト愛ぢやエ、是迄

難面あたりしは、眞實の有、太兵衛
 様に針を持たして何じやいな、此太
 兵衛に針持してどうするのじや、わ
 しや縫物はしらんがなチ、イ、太
 兵衛様ソリヤ取り様が違ふてでソ
 リヤ張を持たしさいふ事ぢやエ成程
 そふかヤ是は下拙の讀違ひ大きには
 かりさん、エ、眞實の有太兵衛さ
 んに、張を持し請出されてほんく
 の女夫エ、ホ、傳海聞いて
 くれほんくの女夫ぢやさいや、
 エ、ソリヤ誰さいな、私さじやがな
 アノおまはんとさかへ、そふじやがな
 チ、嬉しいチ、可愛くくくエ
 、シモタ大事の状しわだらけにして
 仕舞ふたドウく、皺を延してや
 りませふくハア、シイくく
 ム、何ぢやほんくの女夫になり末

永ふ添通したき願にてわざと難面致
 し、ア、こりや風が變
 つて来たさ、俄に肩入襦のばし色事
 しの氣になり、太兵衛がぞくく傳
 海はほくそづく、イヤコレ親方どう
 やら甘臭い文句じやなア誰が聞いた
 い、サ、早ふ讀でマ、聞かしや
 いな、ハレせはしいなハレせはしや
 のどうやら胸がぞきく、とチ、けさ
 は身がぞうさして来た、エ、今迄紙
 治様に云ふたは皆嘘、誠は主に添ひ
 たい心なれど、所詮添ふては下さる
 まいと思ひ詰め私計り死ぬる心に覺
 悟決め、可愛や私ゆへ死ぬる心
 に成つたか、可愛やくく
 くエ、死ぬる覺悟にさはめ候所
 ども心濟み申さず候故太兵衛様の
 存じの方へ、駈落致し暫く身を忍び

り若しも願ひ叶はずばこの品を形見と御覽下されせめては御回向願上げり南無阿彌陀佛くエ、可愛やくと大聲上げすり上げく赤子の時に泣た儘二十餘年と六七年と七八年の太兵衛がタ、タ、溜源御道理様やと傳海がしくかんでやる貫ひ泣き身をもむ太兵衛が秋より落散る状を孫右衛門拾ひ取れ共知らばこそ、コレ才主、わしや小春が書覽見たのでやくが差込チ、しんき、アイタタ、コレく傳海坊貴様の世話にして下さつた、元は是からチ、そふじやく太兵衛さんコリヤ手延にしたら死ぬるぞへ書置に書いて有る、お前の存じの所さは心當りもあるかへサア其心よりさばム、

、まだも木の伊じやコレく傳海老

も来ておくれサア早ふくと後先委細かまひなくあたふた出るを孫右衛門、門の戸びつしやり、詞アイヤコレ、太兵衛さんちよつと待て貰ふ、ヤイく賣主め用が有るそこへ出いこ云はれて俄に開ぶるひがた付膝をふみへて詞ハイ、何にも御用はない筈じやがヤイ我れが名は傳海さいふなエ、ン夫が何こそ致したかへ、コリヤ清水の浮無瀬で坊主客になつたわ併しぢやな、アノ太兵衛と一つで有ふがな、イエくめつそうなく太兵衛様とやらタ、太郎兵衛様とやら、つひに見た事もない人、チ、其見た事もない太兵衛がコレ傳海坊貴様の世話にして下さつた元は是からチ、そふじやく太兵衛様、手延にしたら死ぬるぞへさうぬは又何で受

にしたら死ぬるぞへさうぬは又何で受

答ひるいだ、サア夫れはさばまだ見せる物有るこ、拾ひし手紙押し開き、一寸申上候、此間浮無瀬にて給りし十兩は最早此間の勝負になめられて仕舞候故、今日紙印方にて彼の預り手形の義首尾よく参り候は、又々十兩御貸し下さるべく候、直に申すも如何と御願斯の如くに御座候太兵衛様、傳海より、何と是

でもあらがふかこ、問ひ詰められて文句も出ず、落した太兵衛は後日の難儀と、取にかゝるをまつかせさ入身に成つてかつぎ投げ支ゆる傳海肩車、打すえられて二人はひい、心地よくこそ見えにける、孫右衛門猶二人をぬめ付けたりひるいだ白紙の質筆うぬらぎ工み有り様にサアぬかせ、ぬかさにや繕さ、振上げればア

い申すくぬかしますくアイ太兵衛さんに頼まれて、坊主客になつたわ、用水桶の底抜ハイ、みづからぢやわいな、チーそふで有ふくよういふた、スリヤこれなりに濟してやるイヤナニそこなやつし殿も重ねて治兵衛に云ひ分けないかい、イヤモ勿体ない、是迄小春がなびかなんだ色の意趣エ、ほんにやれく戀程せつないものはない、コリヤ二人ながら顔を上げい、ム、ハイ、儂等マアよい獄門頸ぢやな、ム、ハイ、よふ似合ひますかいな、アエ、たわけめ、小まご云はずさ早く歸れと二人を引立て孫右衛門、門へ突出し詞イヤナニ小春の親分さん貴様達にや言分ない、心任せにいんだくハイく始めて参じましておやかましよう

存じます、もうお暇さ表に出サアコレ、太兵衛様遅いご小春お死ぬるわいな、早く身受を、アイノ夫もよふ合點して居る、シタが大金持の此太が、この様は何事ぞい、傳海、太兵衛様エ戀故ぢやなアさ、何をいふやらたましいご、俱にぬけたる腰の骨互にいたわりいたわれ、ちんばちがく、太兵衛様よつ程惚られさつた、傳海ごえろうごやされさつた、仇口交りそろ、木の伊をさして歸りけり、道引違へいきせきさ、おさんが母は内に入りコレ孫右衛門、こちらの親父五左衛門殿、年寄の氣はいらく、早ふ安否を聞きたいご、昔堅氣でやかましい、ム、御尤で御座ります、イヤモ、治兵衛が事は御安堵なされ、小春が事も何も斯も

皆塔があいて仕舞真人間になりましてわいのご聞いて母親打ほ、笑チーそれは嬉しい、忝いが逆も心落付る爲親父殿へ面暗にござ警紙が書いて欲しいわいの、イヤモ何か扱何ん時でも書きませふご、さうくくくく書認め、母が前へ差し出せば手に取つて讀下し、ム、警紙はたしかに請取ました、サア孫右衛門連立つて行ませふム、ホンニついでに孫も一緒に連れて逝れ、早う歸つて親父殿に安堵させたい、是も十夜の如來のおかけ、詞、是からなりさお禮の念佛、エ、南無阿彌陀佛くくも口ごもる心を直に佛なり、

(床本) 紙屋内の段 (一切)

門送りさへそこ、治兵衛は傍に

あり合す定木を枕轉寢のあたる炬達
の小はる時まだ曾根崎を忘れずかこ
退るふごんの内さへも涙にしめる其
風情おさんは呆れつくくご顔打守
り打守りエ、餘りじやぞへ治兵衛様
夫程名残が惜なら誓紙書ぬがよござ
んすなせにお前は其の様に私ご憎ふ
ござんすへ、ア、コレコレソリヤま
あ何を云やるぞいの子までなした二
人が中にイエ、憎いそうなく憎
ましやんすが嘘かいなア。おまゝし
の十月中の亥の子に炬燵あげた祝儀
逆ソレ處で枕ならべて此方は女房の
懐には鬼が住か蛇が住か夫程心残
りなら泣しやんせ、其涙も蜆川へ
流れたら小春も涙で呑まやらふぞ。
餘りむごい治兵衛様何はお前にどの
様なせつない義理がある連も二人の

子供お前何共ないかいなさ心の限り
くごき立恨み歎くぞ誠なるチ、尤
じや誤つた悲しい涙は目より出無念
な涙は耳から成共出る成らば云すご
心見すべきに同じ目よりこぼる、涙
足かけ〇年が其間露程もりん氣せぬ
そなたに云も恥しなから此間も曾根
崎で残らず聞めた小春めもぶ心中。
今も云今夢も覺め思ひ切てはあるけ
れどアノ太兵衛めが急に身請をする
この噂退て十日も立ぬ中請出さるゝ
義理知らずの畜生めが事は心残られ
ご問屋中の付合にも金の工面に盡し
故小春を退たの何んのまてえしれぬ
やつらが口の端にかゝるも無念な口
惜いさサ思はず涙をこぼしたはいの
ふエ、そんなら小春様はお前に、あ
いそ盡し云てアノ太兵衛が所へ行く

答かへハテきよまご、しい其聲はい
の、イエ、アアそんなら小春様は生
て居る氣じやない死なしやんすはい
なくハテ扱何ば發明でも遠は町の
女房じやアノふ心中者が何の死ふぞ
イエ、コレそふじやござんせぬ小春様
にぶ心中は芥子程もないけれど日外
よりお前のそぶり何を云てもうか
くごもしい悲しい目を見よふかご案
じ過して小春様へいさしいと思わん
す治兵衛殿の爲じや程に思ひ切て下
さんせご書くごいてやつた文引かれ
ぬ義理ご合點して親にもかへぬ懸な
れご思ひ切るこの嬉しい返事程眞
實な心で何の太兵衛の所へ行かしや
んしよ請出された其儘に死る覺悟に
違はない小春様を殺しては、此さん
が義理立すどうぞ命が助けたい思案

して下さんせひよんな事ごうせうと
 始めて明す女房の誠ムウそんならア
 ノふ心中さ見せたのはそなたの頼か
 アイナアホイそりややつぱりおれを
 大切からハアそうさは知らず今迄も
 義理知らずの畜生の恨た心が恥し
 いアコレ夫云手間でこな様往てごふ
 ぞ殺さぬ様にしてしんせて下さんせ
 いな〜ハテ小春も命助かるは百五
 十兩せめて半金成り共手附に渡し取
 留るより外はないが何を云ても金の
 工面に盡きた此身ノウ仰山なそれで
 濟なら安い事と立てたんすの小引出
 し明て取出すないませの紐付帛紗お
 し聞き差出す一包、治兵衛取上びつ
 くりしコリヤコレ小判五十兩ごふし
 てそなたもサア此の金の出所も後で
 語れば知れる事此晦日に岩國の仕切

金にさいかくはしたれども、それは
 兄様ご。だんごうして 商の尾は見
 せぬはいな小春様の方は急な事ソレ
 其小判五十兩と残りは。わしがご。
 かい立つて、あけて取出す染小袖兼
 て、斯さは自茶裏黒羽二重も色かへ
 ぬ淺紫の糸目結びつた鹿の子もお
 しげなふ子供のものもかい集め内端に
 見ても廿兩よもや貸さぬと云ふ事は
 ないものまでも、ある顔に夫の恥と
 我義理を一つに包む風呂敷の内に情
 ぞ籠げる私しや子供は何着あても兎
 角男は世間が大事身請して。あの太
 兵衛に一ぶん立て下さんせと云へど
 いらへも涙聲チ、過分ぞや 忝い手
 阿波して取留請出して圖て置か内へ
 入るにしてからがア、そなたは何ご
 き云さして打しほるればア、何のい

なア心案じて下さんすなへハテモ子
 供の乳母が飯焚か面倒ながら眞實の
 妹く〜持つたと思ふてご。云
 ふ胸まで突かける涙吞込〜で夫に
 立ち貞節は傍で見える目もいぢらしき
 エ、何にも云ぬコレ女房共親のばち
 天の罰佛神の罰は、當らず共マ女房
 の罰が恐ろしい、赦してたご斗に
 て、伏拜む手を、ア、コレ旦那どの
 何しやしやんす勿体ない勿体ない事
 して下さんすないなモ、手足の爪
 を放しても皆夫への爲じやもの後の
 間ではせんない事サア、早ふご三
 五郎呼出し渡す風呂敷懐へ金押入
 れて立ち出る治兵衛殿お宿か門口這
 る五左衛門チ、是はしたり舅殿マア
 よふ御出も夫婦はうち〜三五郎が
 春貢たる風呂敷見付てコリヤあほう

め其包みごこへ持つて行く又質屋へ
うせるのかこつちへおこせと引たく
られびつくり拍子拔参りの宵に知れ
たる心地にて一間の内へ入身は猶も
興に乗つて、大方斯であらふと思た
はい着類着そげを質にまげてお山狂
ひに仕上げるのじやなお山狂ひに、コ
リヤヤ女郎の誠さな鬼瓦の笑ひ顔
さはない物じやぞよサア手短におさ
んに暇やりや女の子は母へ附が世間
の大法ジャがおすえはさつきに、祖
母が連れて戻り此誓紙をひけらかし
ておれに渡した。ア、えらい様でも
さすがは女こんなで行のじやないぞ
よサア誓紙の替りに去状書。あんだ
らくさいと引裂く治兵衛が顔へ打
付てお上にどうさり大白なり。おさ
んは聞兼コレさ、様ソリヤお前聞へ

ませぬはいなく、こちの内の身體の
おそろへたのも皆お前からおこつた
事ないもせぬ銀山にかゝつたま云て
三十兩借五十兩借あげくには其銀山
がつぶれたまやら元も子もないよう
にして仕廻くやんしたぞへ男氣な治
兵衛殿舅の事なり云出せばこつちも
恥と證文も残らず戻し濟さしやんし
た其時にはコレ此恐い顔に涙をこぼ
して悦ばしやんした事を、おまへよ
もや忘れはさしやんすまいがの前
又主の悪所通ひも元の起りはこなさ
んから起つた事れつきと仕方貰ふ
た身體何して金が減たぞま本家の不
審が立つた時ハイ舅殿に取れました
ま鼻毛らしう云れもせず口へ出し
て云こそさつしやられ志を推量し
て初手の間の茶屋通ひは世間へ聞へ

にもさつしやる事かさほんにやれ
く行しやる度くは。わしや後か
ら拜んで居た拜んで計りゐたわいな
く其大恩を打忘れあほうじやのイ
ヤたわけのま假初にも勿体ないこら
へて下されこちの人。さ、様遊で下
さんせま。なだめつ、何つ、兩方へ我
身一つの。せつなきつらさ思ひや
れて道理なる思ひは同じ。うき思ひ
身の云譯に犯の國屋小春はこゝへ來
かゝりて様子ありげな内の体逢ては
いかゞ用水の蔭に隠れて聞居たる
さは知らずして治兵衛は手を突御立
腹の段は御尤おさんが申は皆むだ
事私心に存せぬ事此儘濟せて下さ
れと訛れど聞すイヤならぬはい。何
にも云ふ事聞事ないはい。おさん戻
せば事はすむ併拵へおこせし道

あほふの三五郎机に乗し三ツ具足兩手に抱へ二人が真中サア／＼／＼氣疎い物に成たじやないかヘアノさつきにおみ様ん云んすにはコリヤ三五郎よおれが留守になつたら大かた小春様もござんす程に。そふしたらアノ旦那様ミアノソレいまのム、祝言さすのじや我を頼こ云ておかんしたはいな、そこでおれが思ひつきじや花瓶の松に鶴龜酒の取りたがなかつたさかいで水を銚子に入れて來た媒介役のエ、おれ様じやコレ禮には好の虎屋まんちうコレ今からあほふと云んすなへ／＼サア／＼早ふ呑んせ／＼ハア二人なむら泣んすア、コレないの／＼ようござすかハア扱はコリヤ嬉し涙じやのアイノこな様が云んす通り嬉し涙が／＼こぼれたは

いのふ、去ながら治兵衛様と祝言し
てはなごふもおさん様へエ、何のマア濟ぬ事ばござんせぬはいのおる様は出しがらに成て是ほど味い鱈節をお前にやらんす事じや物志を無足にせずさきり／＼脊でさ／＼んせいのに／＼いのふム、コレヤ三五郎が云通り祝言じやと思へば義理もあるが、互に末期の水盃ムさらはお酌を申さふかい。涙ながらに取上る酒と水さばかはらけの土になる迄葬禮の一本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいさ胸せまるサア／＼目出ふなつて來たワイエ、誰ぞマア諸唄こいでなご見やる外面へ四ツ子の墨の衣に、わらじおけ安養寺尼寺常念はつちソリヤコソ來たいごあほふばかけ出抱て這入のを顔見て恟鷲ヤお末

じやないか。わりや一人戻つたか。
そふしてマアかはつた風をしておるなアイちいさんにこんな美しい着物仕てもらふた、餘り此べは白いによつて何やらたんと書て下さつた此書たのを。さ、様や伯母様にちやつて見せてこいさ云て祖父様が門口迄つれて來て下さつたはいのふヤアと二人は立寄てあたふた脱す墨染の下には何か白無垢におさんが筆のちらし書、エ、ナニ／＼涙ながらに一筆しめしまいらせ候。エ、アハハ、さき程父様連立歸られ候節小春様御忍ばせの姿確に見請候。へ共御存の譯合故御目もじも成むたく書殘し申上まいらせ候。ア、コレ治兵衛様一寸マアわたしにも讀まして下さんせ／＼いなア、エ、ナニ／＼こかく連

合の命が命けたさ小春様へわりなき
 お願ひ申上候ひしにお聞届給はる
 嬉しき海山にもかへまほしく何ぼう
 忝ふ存上まいらせ候エーこの御
 恩を送り候には末々お二人を御夫
 婦さなじまいらせ候くよりほか
 なくぞ存じ候エーその上父様の眞
 實なき我がこはこれ迄の縁と諦
 めまいらせ候又お末こはこなた
 乳にて育て申べく候勘太郎も事を
 小春様へくれぐれ頼上まいらせ
 候エーコリヤマア何の事じやぞい
 のなソリヤ聞へませぬはいなおさん
 様私しやお前からお禮請る覺はない
 コリヤマア私を術ながらすかいな
 くコレイナアコレ治兵衛様ぞ
 うぞまあおさん様を呼戻して下さん
 せくく立たりぬたりうるく

と譯も涙にくれ居たる治兵衛は又も
 引よつてエーナニく舅五左衛門申
 入候エーアの舅親父の恩知すめう
 ぬがるくな事書おる物でアコレそ
 のやうに腹をたてすこ一寸呼でみや
 しゃんせくなエーさんさもう面倒
 いエー舅五左衛門申入候六年以
 前あたはぬ銀山にかり御損失を掛
 候處御舅の由縁を以て證文残ら
 す返し下され千萬忝存じ奉候
 フーん知た事ぢやわい金子の減少本
 家への聞を思召それ故の遊女遣ひ始
 め嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ
 出し申候ア成程エー先頃娘に右
 の入譯委細に承知仕候故輕少な
 がら金子百五十兩先刻衣裳相改め候
 節たんすの大引出しへ差入置き申候
 アコレ小春くあのだんすの引出

し明けて見やサー、早うしやいの
 い、やいの其下の方じやわいの、い
 ほんに爰に入てござんすエーあるか
 エー右金子を以て小春殿を請出しア
 コレ小春一寸マアコレを見やいの
 右金子を以て小春殿を請出し長く御
 添下さるべく候エー娘さん事はお
 末諸共今日尼に致しチコレ小春
 くおさんお尼になつたさいのく
 エーおさん様お尼にならしやんした
 ら私や何させふぞいなツヤテーこの
 通りおさんが尼に成るさ書いてある
 おさん様が尼にならしやんしたらわ
 たしやどうしようくくぞい
 なあ、でも、おさんが尼になつたさ
 いのくくエー娘さん事はお末諸
 共今日尼に致し貞玉智月と法名付天
 下茶屋尼寺安養寺へ連行先刻下され

し五拾兩は二人の者の飯料即寺へ
し詞堂に上申候皆迄讀す兩人はわつ
と斗に聲を上そりや胸怒なおさん様
是まで悒氣もなされず逢して給は
る其御恩聞入たるむかせになり。こ
んな事なら其時になぜそふ云ては下
さんせぬコレナア申治兵衛様おさん
様を呼戻し千年も萬年も添さけて下
さんせ此子は可愛エ、マアないかい
な見れば見る程いたいけな愛にこぼ
る、稚子の乳房にはなる、いちらし
さ孤子となしたるは皆私からおこつ
た事勸忍してと斗にて取亂したるわ
び涙理かせめて哀れなる折からう
そく善六、太兵衛、門口細目にこ
りや見付たヤイ治兵衛めおれが請出
して女房にする小春うねば又何で引
込だ引込んだア、コレ太兵衛様く

こま言云にや及ばぬ是迄重々意趣あ
る治兵衛めぶち殺して腹いよこ双方
よりぶちかゝる利腕摺んでコリヤ
く三五郎く小春に怪我をさせぬ
様働け働けチツトまかしよさ箒の助
太刀あなたこなたをちらくさ見る
目あやふく氣をひやすいらつて打込
善六太兵衛折よくはづせば二人はご
し打そりや治兵衛めが切おつたさわ
めげばせせなく乗かゝり日頃の意趣
ささめめの刀コリヤく三五郎よ
くお末を連れて奥へ行くコレ小春
くコ、おじやくエ、なんにもこ
はい事はないくはてこわいこまは
ないわいの斯成上は是非に及ばぬ、
最後は網島の大長寺人なき内にサア
おじやと手を取急ぐ悪縁の末は涙の
もした草嚙の種と成にけり。



勸進帳の段

武藏坊辨慶 竹本大隅太夫
 富樫左衛門 竹本相生太夫
 源 義經 竹本南部太夫
 伊勢三郎 竹本鏡太夫
 駿河次郎 竹本長尾太夫
 片岡八郎 竹本富太夫
 常陸坊 竹本源路太夫
 常陸坊 竹本貴鳳太夫
 梶下左忠太 豊竹辰太夫
 番 卒 豊竹竹太夫
 番 卒 竹本隅榮太夫

勸進帳

淨曲の勸進帳は遠く貞享三年に宇治加賀掾の西の櫓初代竹本義太夫と名聲を争つた際「凱陣八島」を出しその中にこの勸進帳を出したことがあります其後「番場忠太紅梅籠」一齣「胎内拵」にもありますが今度上場される「勸進帳」は明治二十八年書下したのが博勞町彦六座跡の稻荷座で初代團平の作曲であります。大体に歌舞伎の勸進帳と謡曲の安宅を合せたもので、以来團平師の秘曲として来たものであります。

(床本) 勸進帳

斯様候者は、加賀の國の富樫の

某にて候。扱て頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿奥州秀衡に頼み給ひ十二人の作山伏さ成て御下向の由頼朝聞し召し及ばれ國々に新關を建て山伏を堅く撰み申せこの御事にて候。去聞この所をば某承つて山伏を留め申候。今日も山伏の御通りあらばこなたへ申候へかしこまつて候。旅の衣は篠懸の旅の衣は篠懸の、露げき袖やしぼらん、是やこの行も歸るも別れては知るも知らぬも逢阪の、山隠す霞ぞ春は恨めしき。鴻門の櫓破れ、都を後に義經公、習はせ給はぬ旅姿、身は山伏の強力も、袖の篠懸露霜をいつを限りと白雪の越路の春に急くな

人形

武藏坊辨慶 吉田榮三
 源義經 桐竹紋十郎
 常陸坊 桐竹門造
 梶下左忠太 吉田玉市
 伊勢三郎 桐竹紋太郎
 駿河次郎 吉田光之助
 片岡八郎 吉田文作
 富樫左衛門 吉田玉松
 番卒 大ぜい

鶴澤道八
 豊澤仙糸
 野澤吉彌
 鶴澤清二郎
 野澤喜代之助
 竹澤團二郎
 野澤勝芳
 鶴澤道造
 豊澤仙三郎

る、御心根ぞ痛はしき。扱御供の人々々は、伊勢の三郎、駿河の治郎、片岡八郎、常陸坊、辨慶は先達の姿となりて行空や、海津の濱も踏み分し、芦の篠原波寄せて磨く嵐の烈しきは花の安宅に着にける。花の安宅に着にける。辨慶は足を止め、詞ハ、我君に申上入は、先刻喜三太が申せし關所は、則彼にて候と言上すれば、義經公傍見廻し、いかに辨慶斯く行く先々に關所を設け、山伏を堅く撰むとあれば所詮陸奥迄は思ひも寄らず、名もなきもの、手に掛らんよりはさ、覺悟はさくに極めたれ共其方は練を用ひ、新客に形を替木にも草にも心を置微運の我身實にや思ふ事儘ならぬこそ浮世なれ、猿この上に旁々の、斗ふ旨の有やいかに

と宣へば、常陸坊實今日の御大事、武藏殿を始め旁々共、得と談合致すべしと、いふに片岡ヤア手ぬるし、某の存するには、帯せし太刀は何人の爲、いつの時にか用をなさん、君の大事の今この時、一身の臍をかため、關守始め番卒をも切倒し通るに何の手段隙いらん、ホ、ホ、能く言はれし入郎殿、此治郎連も同じ事、多年の武恩報する時節、關守いか成勇有り共、何條夫に恐れんや道中の慰みに、關所の聖めを踏み破らんと勇る進めば、伊勢の三郎ホ、ホ、ホ、いさぎよし面白し、イテ三郎が先陣なし、御道開きを致さんさ、勢こんで見えければ、辨慶暫しと押し止めコハ何れもは物に狂はせ給ふかや我君常々の御説意には、

八島にて繼信吉野にて忠信、身代りさして死せし事、無念なりこの仰は愛なり。斯つらなりし銘々は生れし日こそ替る共、死する所ぞ死る日は一緒と兼て誓はずや、況して敵を侮るは、能き侍の仕業ならず、せく所ではない、先程も申す如く、この關一つ踏み破つて通れば逆、行先々にかゝる沙汰の有時は、事を求めて破る道理、たやすく陸奥へ参り難しそれ故にこそ、恐れ多くも御主君を新客強方に御仕立申奉るは、無難に關を通らん心底、兎にも角にも某に、御んあつて、御笠深く召されし上、草臥たる体に紐ひ、我々より後に引下りて御通りあらば、よも我君さと思ふまじ、ホ、辨慶いしくも申たり、我は如何なる艱難もいさはず事の成就を、旁々配慮有るべしと仰に皆々はつこ計君の御運の拙きを、思ひはかつて顔見合せ、無念と落す涙の雫、安

宅の關の道芝に、朝露置し如くなり。斯くては果じと辨慶は氣を取り直しいかに強力疲れはさこそ今一息、氣を勵まして歩むべし、いさ通らんこ、諸共に關の方へぞ立ち、る、辨慶關の月に聲を通じ、いかに關守殿御役目御苦勞千萬、我々同行の山伏通行いたしたしイザ開門あれと言入れば、番卒共は口々に、スワ山伏の來りしとは、イデ召捕へ一詮議、旁々來れと立懸げば、コハ組忽なり關守達何故あつて開門もせず召捕んさは狼藉千萬、仔細は如何にぞ尋ねれば梶下左忠太聲高く、ホ、其仔細さいふは頼朝義經御中不和と成らせ給ひ、義經公は巽山伏となつて奥州御館秀衡に便り給ひ下向有る由聞し召及ばれ斯の如く諸國に新關を構え堅く詮議を仕るこ。云尾に付て番卒共、誓誠の山伏にもせよ、修験者に限り堅く通路成難し、たつて關を通るさあらば

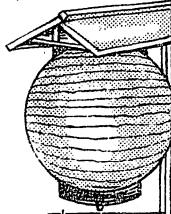


現代的

電話戒三七五六番

一命にも及ぶべし、足元の明るい内誠の山
 伏さいふ證據を置、早々爰を立ち去られよ
 さ威猛高にひしめけば、ハ、委細承りて
 候か、夫は作り山伏をこそ止めよこの仰
 なるべし。誠の修験者を止めよこの仰にて
 はよも有るまじア、ラ六ツク敷の間答無益
 なり、一人も通す事罷りならんと言ひ放す
 こなたははつと力を落し、アラ頼なし力な
 し、ハ、ア情知らざる人々かな、ソモ我々
 同行は、忝くも勅命をうけて、南都東大
 寺大佛殿建立の爲國々を勸進する客僧なり
 夫れを斯く止め給ふは、是に上越す罪ぞ有
 らんや、熊野權現の照覽有て御罰を蒙る事
 疑ひなし、ヤアいつ近いふても叶はぬ事、
 ならぬくくくくくならぬくくく高呼
 ばる、ヤレ暫く待たれよ、富樫之助正廣夫
 れへ參つて糺さんご、襖左右へ押開かせ富
 樫之助正廣衣紋止しく立出て關の外面に打

向ひノウウ、客僧達我は當所の關主、富樫
 之助正廣と申す者前刻よりの押問答、具サ
 に聞取り申したり、今貴僧の詞によれば、
 勅命を承つて、日本六十餘州を勸進せら
 るゝこの事、左程尋き客僧を、追立ひも心
 なし、殊に山伏の眞偽を撰む役目なれ承
 りたき仔細もあり、ソレ旁々關門を開かれ
 よこ、下知に従ひ番卒ども本戸を左右に押
 開けば、コハ有難しと先達の、後に續いて
 人々は、皆門内に入にける、富樫之助は詞
 を正し、先刻先達の詞には、南都東大寺大
 佛殿建立の勸進と仰りしがシテ貴僧の御
 姓名は、ハ、愚僧は讃岐の阿闍梨と申す者
 伯父なる美作の阿闍梨は、東山道を信濃へ
 下り愚僧は北海道を勸進致す、併し番兵達
 の無禮の段は咎むるに足らず、シテ關主殿
 の御寄附は如何に、ホ、某も心許りの寄
 附仕らんご定めし勸進帳を御持參ならん



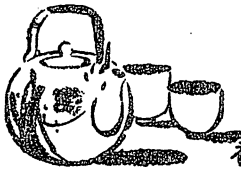
うま海

堀江廓
 堀江タクシー前

下關本場
 ちり鍋
 季節料理

願はくば聽聞の致したし、イザ勸進を召されよと望む詞に辨慶ははつと思へごさあらぬ体、ハ、ア仰に従ひ只今讀上申すべし、ご笈の中より往來の巻物取出し勸進帳と號つゝ高らかにこそ讀み上げられ、夫つらくおもんみれば大恩教主の秋の月涅槃の雲に隠れ生死長夜の永き夢を驚すべき人もなし、爰に中頃の帝聖武皇帝と申し奉るは最愛の后に死別れ給ひ追慕の情止み難く涕泣の御涙かほく時なし、かるが故に上求菩提の爲として廬遮那佛を建立仕給ふ、然るに去時壽永の比兵火の爲に焼亡し終んぬ、斯程の靈所絶えなん事を歎き俊乗坊澄源あまれく諸國を勸進す一紙半錢と雖奉財の輩は無比の樂みを極め當來にては九品蓮座の上に座せん歸命啓首敬つて申すと天へも響けと讀上げたり、富樫大いに感じ入りホ、勸進の趣意承つて殊勝に存す

る、某も心許りの寄附仕らんヤアく者共布施物はへ持參れ、はつと心得士卒共持ち運んだる白木の臺、加賀維袴其外に多くの布施物取揃へ御前にこそは並べけれ、如何に先達殿我幼少の頃よりも佛陀を歸依し多くの聖人に逢ふ度毎、其宗門の旨を聞けり、然るに未だ先達の如き名僧に逢はざる故、修験の法の委細を知らず、今我尋る趣を一々御答下さりよふやと心有りげな正廣の詞に扱はと思へ共爰ぞ大事ご思案を極めホ、いしくも問はれし關主殿愚僧も心得居るかごは残らず御答へ申すべし、ホ、早速の御承知過分に存るさらば御尋ね申すべし、然らば御答仕らん、ごたがい形改むれば義經手從息を詰様子如何と守り居る、正廣膝を進ませていかに先達抑々世に佛徒の姿種々ある中に、山伏達の異形の姿はいかなる仔細に候ぞ、夫レ修験の法と



大坂御茶
茶室

電話新町六三番

いへば胎藏金剛兩部の旨を修し、嶮山惡所を踏み開き、世に害をなす、惡獸毒蛇を退治して難行苦行の功を積み惡靈亡魂を得説成佛させ天下泰平の祈禱を修す表は驗魔の相を顯し惡鬼外道を降伏さす是神佛の兩部にして百人のいら高珠敷に、佛跡の利益を顯す。ム、シテ又袈裟を身にまこひ、佛徒の姿に有ながら頭に頂く兜巾はいかに、ホ、則兜巾は五智の寶冠にして武士の兜に等しく、十二因縁のひだをすえて是を頂く。ム、シテ篠懸の因縁は、是ぞ九會曼荼羅を表す、黒き脚半は胎藏界の黒色也八ツ目の草鞋は八葉の蓮花を踏むにかたざる、シテ山伏の出立は則ち其身を不動明王の尊体に形ざる也、出入る息はあうんの二字、ム、扱又寺僧は錫杖を携ゆるに、山伏、檢の金剛杖に、五体をかたむるいばれば何ぞ、事もおろかや金剛杖は天竺檀特山の神人阿

羅々仙の持給ひし靈杖にて胎金兩部の功德を籠めたり、釋尊未だ瞿曇沙彌と申せし時阿羅々仙に給仕して難行の功を積み御名も怒普比丘と改めて此金剛杖を授かり給ふ、かゝる靈杖成ばこそ、吾祖先役の小角を用ひて山野を經歷し給ふなり又杖に、切目を入たるは、地、水、火風空、木火土金水をかたざりたり、ム、して佛門に有ながり帶せし太刀は只者をおごさん爲なるや、誠に害せんためなるや是にも言はれありやいかに、ホ、是ぞ柴打と號して我中興の聖人大峰山に入し時深山幽谷を切開き御山に住む毒蛇を退治成佛させたる其功德又、王法佛法に害をなす者は一殺多生の利に寄て忽切つて捨るなり、ム、眼に遮は則ち有物は切にもせよ、若形なき陰鬼妖魔は王法佛法に障礙なす時は何を以て切り給ふやホ、無形の陰鬼妖魔は九字の眞言を以て切

は用御の話電お
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番



の年新朗明
づまは會宴御
いのじ感・位本様皆
〜 理料泉溫一南

のまसानみ
理料泉溫一南

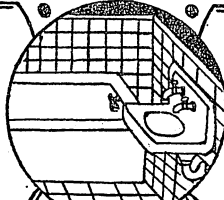
橋 ッ 四

断せん、ムシテ九字の眞言といふは如何なる義かや事の次に問申さん、サハサハ、いかにくウム其九字の眞言は吾の宗門の秘密なれ共關守殿の懇望もだし難くイザ説き示さん、サ具サに聞かれよ、夫九字の眞言は臨、闔、者皆陣烈在、上の九字なり、まさに切んごする時は正しく立つて齒を仰ぐ事三十六度右の大拇をもつて四從を讀く後に五横を書き急々如律令と呪する時はあらゆる五陰鬼煩惱鬼惡魔の類はいふも更なり惡鬼外道死靈生靈忽ちに亡ぶる事籍に熱湯をそぐむ如し實に元品の無明を拂ふ大利劔莫鄺の劔も何ぞ及ばん兵家が是を用る時は敵に勝事疑ひなし、元より九字は法華經の中より、撰み給ふ妙文にて、其徳廣大無量なり、まだこの外にお尋ねの筋有らば一々答へ申すべしとよごみ濁らぬ辯舌に、富樫を始め並居る士卒皆一同に舌を卷

感じ入てぞ見えにける、ハ、斯程尊き客僧を暫しも疑ひ申せば、某が不念アラ恥しや恐れ有り、イザ布施物を御呼納下されなば、某が悦び此上なしハアコハ有難き大檀那現當二世安樂何の疑ひ有べからず重れとお頼み申度は我々は近國を勸進して卯月半に登るべし、重き高き品々は夫れ迄お預け申し置く、鏡一面砂金一包は受納致さんホ、成程御尤なる御頼み委細承知仕るイザいづれも心置なく御通りあれさ赦の詞に先達はコハ有難しと一禮述べイデ、方々急ぐべしと、詞に銘々うち連てしづく關を通りける、進み下つて強力、は惱める足を踏みしめ乍ら後に續いて出で行くを強力待イヤサ新客待と、聞より皆々ばつこばかりスワ我君を怪しむるは一期の浮沈極りぬさ皆一同に立歸るア、暫しあはて、事を仕損すなヤイ強力め早々通りおらぬかこ、

西區立寶堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話四〇二六六九
電話四〇二七六九

阪急 夙川
岡部商會支店
電話四〇一九七六



化粧水
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化装置
特許無臭便所

叱りつけければ富樫之助ア、イヤ、あれはこなたより止めたり、ム、何故有つて留められしぞ、サ、ハ、ハ、ハ、さればこそアレなる新客九郎判官ナニア、ハ、ハ、ハ、義經殿にヤサ似たる故に留め申すム、スリアノ強力が判官殿に似たるごな、いかにもハ、ハ、ハ、ヤイ新客の強力めがウヌ儕は、適の果報者日本の名物義經殿に似たさいはる、仕合せは我等が爲にはア、不仕合せエ、マ憎い奴エ、腹立や日高くば能登の國迄參らんと思ひしに僅かの笈を買ふて後に下ればこそ關守殿に怪しまれ修行の邪覺なす奇怪者此先々の關所にもかゝる疑の或時は猶々路のさよたげなりア、何とせんム、夫れよ、イヤナニ關守殿近頃御無體には候へ共御不審のかかりしアノ強力我々歸路の砌迄御預り下されて十分の御詮議を願ひたし我は能登迄急かんぞ行かんぞするを強力は衣の袖に

取絶りコハ情なの先達殿、是迄長道中の泊り、心に心を付け道の歩みは重荷を負ひ幾瀬の艱難凌ぐのも今にも行を仕途げん爲其甲斐もなき無念慈悲の詞何卒我も召連れて下されかしこ、むれば先達は怒の顔色ヤアぬかしたり其たわ言汝計りも重荷を負ひ難行をすると思ふか此先達も元は新客惣じてこの程より何についても教えを背く憎き奴エ、エ、エ、エ、イテ物を見せてくれんす、金剛杖を追取つて情用捨も有らばこそ脊骨腰骨きらいなくさん、くに打擲しイカに方々賤じき強力が成敗に御身達の太刀刀を借らんよりこの杖にて打殺さばかれも成佛致すべしと又打かゝるをヤレ暫く夫にて心中の疑ひ晴申たり我等の不明は新客の災難偽りならぬ先達の誠を見る其上は鎌倉殿への恐れもなし早々通行致されよ、ハ、ア有難き關主殿のお詞ヤイ強力め大檀那の仰せなく

正 賀

の 前 座 樂 文

シカヨリ樂

三四七三場船話電

ば打殺しても捨てんす物命冥加に叶ひし奴
 以後をきつさ心得居ろうさ尖き眼にねめ付
 けたり富樫之助はつゝ立上り我は猶も嚴重
 に警固をなし義経殿を詮議致さん、いかに
 客僧またの再會いざさらばくく云捨
 てかなたへこそは入りにける後に皆々安堵
 の思ひ又もや事のなき内にいざ急かんぞ關
 守に暇を告げて主従は虎の尾を踏毒蛇の口
 を逃れ出たる心地して關を後に先の關を早
 抜群にほご降りて候間、此所に暫く御休
 みあふするにて候皆々近ふ御參り候へ心
 得て候、いかに申し候扱も只今の氣轉
 更に凡愚のなす業にあらず、只天の助護と
 ここそ思へ、關の者共君をあやしめ生涯限り
 有つる所に、兎角のせひをもんたはずして
 我君を助る事我々の及ぶ所にあらず、驚き
 入つて候、夫れ世は末世に及ぶと云へ共
 日月未だ地に落ち給はず危き難をさげたる

も、全く君の御武運を、神明佛陀の守護有
 る印ハ、ア有難し、去り乍ら敵を欺く計
 略なれど正しき君を強力とするさえも冥加
 至極と思ふ上、杖にて主君を打告め空恐ろ
 しき天罪を受くべき我はいざこれ御痛は
 しき御身の果さ、思へば上しこの杖は幾千
 貫のかなえよりばるかに重き心地して日頃
 きたひし此腕もしびれる如く覺えしぞと土
 にひれ伏し三拜九拜君を敬ひ奉りついに
 は泣ぬ辨慶も一期の涙を殊勝なり、ノウ
 く客僧達、某先刻客僧達へ聊示を申
 せし段役目とは云ながら、罪多くして面目
 なし、夫故にこそ御後慕ひ、粗酒一献勸め
 たく是迄持參致したり、イザ盃を廻らせ
 給へ、早さくく進むれば武藏坊心得て
 實にくも心得たり人の情の盃を請け
 て心を取らんさや、是についても猶人に心
 なくれそくれはざり怪しめられな方々さ、

謹賀新年

萬袋物卸問屋



福本又兵衛商店

大阪東區博勞町堺筋

電話船場三二〇五番
 振替大阪七九〇八番

辨慶に諫められて此山影に一やざりに、さ
 りとまといして所の山路の菊の酒を呑ま
 ふよ、面白や山水に面白や山水に盃を浮
 べて、流に引るゝ曲水の手まづきへぎる袖
 ふれて、いざや舞を舞ふよ、元より辨慶は
 三塔の遊僧舞延年の時の和歌、是成、山水
 の落ちて巖に聞くこそ、なるは瀧の水、エ
 いたへ酔ふて候程に先達お酌に參つて候
 給へ候べし、いかに先達一さし御舞候へ、
 さらば舞ふするにて候鳴るは瀧の水鳴る
 は瀧の水、日は照ることもたへずさふたり、
 さくく立や立が弓の心救すな關守の人々
 暇申さんさらばよさ笈を押し肩に打掛け
 虎の尾を踏む毒蛇の口を遁れ出でたる心地
 して陸奥の國へぞ下りける。

二十月廿一日 初日
東洋の母
 栗島すみ子演出
 寶演 **春は朗らかに** 二幕
 客員王マスターキートン氏主演
キートンの麥酒王

東京大新派劇

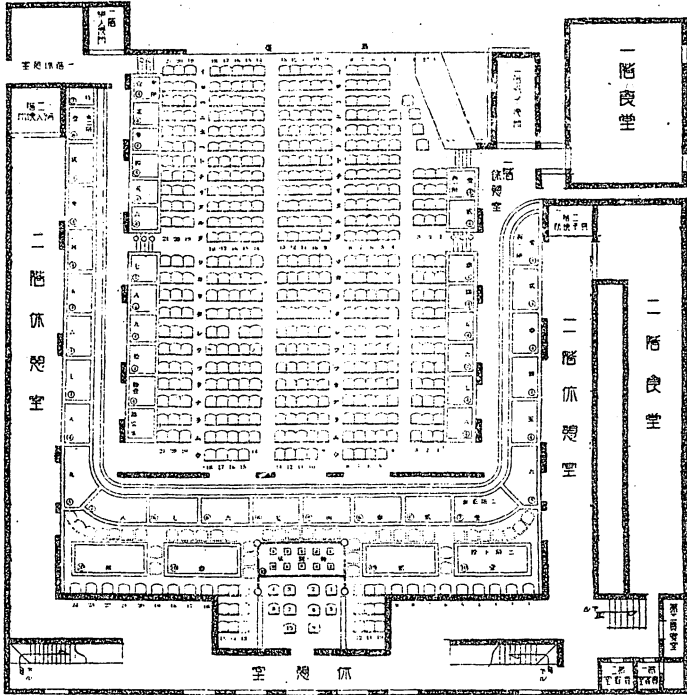
十日 初日
晝の部
 第一新てるて姫 一幕
 第二花御葵の上 一幕
 第三不如歸六景
夜の部
 第一露のあこさま 三幕
 第二補助椅子 一幕
 第三俠艶録七幕

・設備断然東洋第一！
アイヌ・スケート場
 ウィンタースポーツの王座！
 歳末から新春への絶好の行楽！
 毎日 午前十時 至午後十一時
 日曜、祭日に限り午前九時より
 一般外來入口 北側電車通り
 ・御観劇の方は幕間の時間を利用して自由にお出入りして頂けます。
大阪歌舞伎座 アイヌ・スケート場

大阪歌舞伎座

座日朝	座天辨	座竹松	座花浪	座中
切封日近	切封日近	切封日近	日初日一 一討入會 我三幕 二三面記事二幕 三大政小政道中記三幕	日初二 前狂言南鏡山見入 中狂言小鏡山見入 次狂言小鏡山見入 切狂言小鏡山見入 大寶景事名大津
初戀の夜は更けて 平島すみ子主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 女と生れたからにや	初戀の夜は更けて 平島すみ子主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 女と生れたからにや	初戀の夜は更けて 平島すみ子主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 オールドキー 藤井貞主演 女と生れたからにや	レニ・リフエンシユタル主演 モリス・シュバリエ氏主演 戀の手ほどき 日米交歓レヴユ 踊る1934年 世K.O. 壯大 界大 水	レニ・リフエンシユタル主演 モリス・シュバリエ氏主演 戀の手ほどき 日米交歓レヴユ 踊る1934年 世K.O. 壯大 界大 水
天 明 旗 本 傘	右門八番手柄 河東義三郎主演 河内山宗俊 藤三行状記	おさだの仇討 右門八番手柄 河東義三郎主演 河内山宗俊 藤三行状記	日一陰 三人は斯くあるべきか一幕 三強盜の妻は聖母三齣 四只野見人生勉強12景 初春興行新派劇 獸六幕	二 童殿打仕返しまで 長眠連中 常盤津・長頭囃子連中 彩申奴繪 常盤津・長頭囃子連中

文樂座御席場案内



御、観、覽、料、の、外、一、切、御、不、要、の、上、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、樂、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、齋、切、符、壹、等、お、座、席、壹、等、椅、子、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、し、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、く、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、さ、れ、ま、す、御、用、命、の、節、お、呼、出、し、の、電、話、は

南、四、七、一、一、番、で、御、座、あ、ま、す

●切符發賣場右指定席切符は當日
前賣とも正面西側本家入口に
て發賣して居ります。

●二等席・三等席切符は當日正
面入口にて發賣致します。

●尚多人數様お団体様のお申込
も御相談いたします。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間が混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座います。すから持ちものはなるべく御預り所へお預り下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。すからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたします。すから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致します。すから不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場券は

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。すからお場席の番號をお忘れないやうに御願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げます。すから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役に相勤めます。すから、豫め御諒承願ひます。

當座の使用

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

休憩の間

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。すから御使用下さい。△シタオルはレイトローション使用。

四ツ橋

文樂座

前賣切符専用電話南四七一

電話南 七四〇八番 三七八八番

昭和八年十二月廿一日印刷
昭和九年一月一日發行

編輯人 成山桂三發行 文樂座

印刷者 永井大三郎 印刷所 永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐通一丁目
大阪市西區土佐通一丁目

大阪外市八尾

大阪競馬

延順天雨

一月一
十九日(金)
二十日(土)
二十一日(日)
二十二日(月)

單複式併用
八頭以上三着位
障礙及特殊八三
競走あり

謹賀新年

大阪電報通信社

社員一員同

若肌になる

トリトクリーム



店商平賛尾平 京東